

熊野と世界の果てで

あーふあ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

戦闘の怪我で視覚障害になつた熊野と、艦娘を失つてトラウマになつた提督。

ふたりは辺鄙な土地に飛ばされても楽しく生きようとする。

目 次

世界の果てで熊野と暮らした3週間	1
世界の果てで熊野と暮らした1ヶ月	9
世界の果てで黒髪ワンコと遊んだ日	17
世界の果てで熊野と暮らした1か月と2週間	26
閑話 世界の果てで鈴谷と出会った3時間	34
世界の果てで摩耶さまを迎えた日	37
世界の果てで熊野と暮らした1か月と4週間	47
世界の果てで熊野と過ごした2ヶ月	56
世界の果てから熊野がいなくなつた日	64
熊野と世界の果てで	74

世界の果てで熊野と暮らした3週間

八畳ほどの小さな木造二階建ての監視所兼住居の一階にある、監視所にてドアと窓を開け放つ。

外からは夏と潮の香りを運んでくる風と、小さく聞こえてくる波音を部屋に迎え入れ、俺は白い軍服の前をはだけさせながら一心に机に向かって作業をしている。

朝日の光が差し込む小さな執務机の上には、点字タイプライターと点字の本、それと国語辞典を置いて本を睨みながら、ゆっくりと点字を打ち込んでいく。

カシヤン、カシヤン、と断続的に音を鳴らしながら間違いのないよう目にしつかりと確認をしつつ丁寧にタイプをしていると、頭がぐつぐつと考え事で沸騰してきそうだ。前に、鎮守府にいたころは体を鍛えるために艦娘と一緒にトレーニングをし、机仕事は秘書にかなり手伝つてもらつていた。

そのツケがこれだ。

ぐしゃぐしゃと短い髪をかき乱し、精神を落ちつける。

俺は何のためにこんな苦労をしているか。

それは目が見えなくなつた、重巡洋艦『熊野』のためだ。

熊野は軍支給の制服を着てボニー・テールの髪型をし、椅子に座つている。開けた窓の前に体を向けていて、ちょうど俺に背を見せる恰好となつてている。

それぞれ別な鎮守府から辺鄙な場所に異動させられた俺たちは欠陥持ちだ。

だが、そんな欠陥があつても軍は人材に余裕はなく使えるものは使う精神。だから、戦略的価値が皆無とされている場所でも、もしもの時を考えて人を配置している。

人員は30のおっさん提督である俺と、重巡艦娘である熊野との二人きり。建物は監視所兼住居と木造の棧橋。装備開発もできず、軍部隊の形すら成していない。配給も少なく自給自足体制を整えないところ危険だ。

給料の遅配も多く、俺の貯金を削つて自分たちの生活向上に回している。

たとえば、今。俺が苦戦しているこのタイプライター。

熊野が来て、一緒に暮らし始めて三週間。彼女の生活が楽しくなるようになると点字の勉強を始めたが、軍は役に立たないものに予算を出してくれるわけではなく、自腹で買っている。

何もかもが足りないと想いがちだが、深海棲艦にあげるぐらいに余っているものがある。それは有り余る時間と自然が多くすぎるこの環境だ。

溜息を小さく付き、両腕を上にあげて固まつた腕をほぐしていると機嫌が良さそうな声が聞こえる。

「提督、そろそろ休憩なさつてはどう？」

俺へと体を向けた熊野は両目をつむり、優雅さを感じる微笑みを浮かべている。

ここに来てからこうやって、俺を心配してくれる熊野を見ていると彼女のためなら多少の苦労など当たり前と思うようになってしまつた。

視力を失い、雑に扱われて辺鄙へんびなところに飛ばされたというのに、”提督”という役職を怨んだ様子は全く見られない

——上からの報告書では、熊野は疲労が溜まつたまま連続の戦闘をさせられ大怪我をした。修復するのも後回しになり、目だけが治らず捨てられた。

と、書いてあつたのを思い出す。実際に熊野と過ごしてわかつたのは、視力はなくなつたものの、光があるかないかは感じられると言うことだ。

「美人さんにそう言われちゃ、休むしかないわな」

椅子から立ち上がり、もう一度背中を伸ばしながら部屋を見渡す。熊野と暮らすようになつてから、歩きやすくするために散らばつていた部屋の位置をすつきりさせた。狭い部屋ながらも広々とした感覚と清潔さを感じる。今日もその綺麗さに我ながら満足しつつ、されたソファーや本棚の位置を直しながら、窓際にいる熊野のところへ

行く。

足音に合わせて俺に顔を向けている熊野の前にやつてきて、両肩に優しく手を置いて顔を正面から頭に近づけてフローラルな髪の香りを嗅ぐ。

「心が落ち着くなあ」

「セクハラですわよ」

ちよつと嫌そうな声を出しながらも微笑んでいる熊野は、俺が肩に置いた手をそつと外してくる。

以前いた鎮守府の艦娘たちと違つて、この熊野は見ているだけで、そこにいるだけで強い安心感がある。はつきりとした理由はわからぬがこの静かな場所の雰囲気と、目で直接見られていないからかもしれない。

熊野から離れ、部屋のところどころに貼り付けている点字紙の確認をする。

電気のスイッチや本棚の中にある物の種類を識別できるようになることは俺にも熊野にも良いことだ。軍の書類仕事も料理も手伝つてもらうことも任せることもできる。

本棚の前に立つていると、熊野が椅子から立ち上がり壁に手を這わせながら隣まで来て、俺が買ってきた点字本を探しはじめる。

「お嬢様は優雅に読書タイムですか？」

「お昼に苦労するのはわたくしとしてよ?」

羨ましさの気持ちを込めた問いかけに対し、「旬の野菜料理」という点字本を手に取り、読書好きの熊野は椅子に戻っていく。

熊野が本を読み始めたのを見届けたあと、俺は机に戻つてタイプライターとの辛い格闘を再開した。



昼は熊野が作つた野菜中心のご飯を食べたあと、夏まきの野菜たちの様子を見に、裏手の畑に来ている。

頭に麦わら帽子をかぶつて首は井戸水で濡らしたタオルを巻きつけ、じりじりとする日差しの中でジョウロを使って水をまいている。汗がじわじわと噴き出るのを耐えながら芽が出始めている野菜を

見るのは満足感がある。自分で自分の食べるものを育て上げるということがとても楽しいことと気付いたのは、この場所に飛ばされたからだ。

野良仕事をするのは初めてだったが、野菜入門の本と熊野の知識を借りながらなんとか順調に育てることができている。

空になつたジョウロを置き、広がつてゐる畑を見て満足げにうなづく。

この調子で少しずつ拡大していこう。

「お野菜の具合はいかがです？」

これから予定を考えていると、声をかけられ振り向くと左手に杖、右手には水が入つたバケツを持つてゐる熊野がいた。だが監視所を出るときにはかぶつていたおそろいの麦わら帽子がなくなつてゐる。

「熊野、頭はどうした」

「ああ、それはいたずら心を持つた夏風に遊ばれましたの」

荒い息をつきながら近くまで来た熊野にかけよつて、自分の麦わら帽子を外して熊野にかぶせ、手から水で重くなつてゐるバケツを奪う。バケツから水をジョウロに移し、余らせておいた水に首から巻いていたタオルを突つ込んで水を染み込ませる。そのタオルの水を絞つてから熊野にかけよつて、彼女の肌から流れ出でてゐる汗を拭く。「つ！ 提督、一言声をかけて欲しかつたのですけど」

「……あー、すまん。忘れてた」

汗を早く拭かねば、という思いが先に行きすぎて、見えない状態から突然冷たいものがあてられたときのことまでは考えていなかつた。拭き続ける俺の手から熊野は右手でタオルを取り、手をまつすぐに伸ばして胸にぶつかつてから首に向けてタオルを持つてくる。

「少しは自分を大事にしてください」

「俺なんかより熊野のほうが何倍も大事だ。豪華なドレスを着せて見せびらかせたいほどに」

「あら、くどいていますの？」

「まさか。労働力に倒られては困るからな。それに女は20後半が一番いいんだぞ？ ……さて、次は海に行くからな。休んどけ」

熊野に背を向け、ジヨウロで烟の水まきを再開する。

『振られましたわー』と感情のこもつてない棒読みで言葉を残してから、監視所に入つていく杖と足音が聞こえてきた。

こんな何気ない会話すらも楽しく思える熊野に感謝。

◇

烟から戻り、監視所で一休みしてから海岸に何か使えるものが打ち上がつてないか探すためにバケツを持ち、俺と一緒に麦わら帽子をかぶせた熊野を連れて行く。

防砂林がめぐらされている監視所の周囲数kmには民間人もなく、軍人がいるせいか海に人がいるところを滅多に見ない。

静かな波の音が聞こえてくる砂浜には、艦娘が出撃するための桟橋と提督用のモーターボートが係留してある。

熊野を桟橋手前に残し、船や桟橋が傷んでないかを軽く確認したあと、熊野に俺の腕を掴ませて砂浜を歩く。

海の砂は足を取られやすいため、左手で杖をついている熊野に右手で俺の腕を掴ませ、その掴まれた腕をまっすぐ伸ばして動かさないように強く意識し、海とは反対の側の砂浜を歩かせる。

漂着物にぶつかつて危なくないように、波打ち際からだいぶ離れたところを歩く。

速度は熊野に合わせて緩やかに。強く吹く潮風と静かで心地よい波音を耳に入れながら、目は地面に集中を。

砂浜には魚や海藻が打ち上げられてたり、使えるかもしない漂着物（ゴミ）があるから、しつかり探さないといけない。

「今日はおもしろいものが何かあります？」
「おもしろいものねえ……」

ゆっくりと立ち止まり、首をぐるりと回して周囲を見渡す。

目に映るのは海に浮かんでいるウミネコと打ち上げられた漁具や様々な漂着物があるだけ。それらを見て、あとでゴミ拾いすると決めてから考えごとが頭をめぐる。

こんな地の果てともいえる場所に来てしまった俺と熊野。

二人では戦力にならないのは当然で、軍の支給もどこおり生きて

いくのも苦労する。平穏すぎるこの場所で俺は人生を終えるのだろうか。

この場所を言葉で表現するのなら、

「……人生の終着点か」

言葉を静かにつぶやくと、すぐに元気な言葉が返ってくる。

「世の中のものは何でも我慢できる。幸福な日の連續だけは我慢できない」

どういう意味か疑問を浮かべ、熊野の顔を見ると彼女は俺に顔を向けていなく正面に向けたままだ。

「なんだ、それは」

「ゲーテですわ。甘いお菓子だけをずっと食べ続けるのは飽きますし、体にも悪いと思いますの」

明るく言う熊野は掴んでいた俺の腕と杖を手放し、地面を一步ずつ確かめるように歩き始める。

俺は地面に落ちた杖を拾い上げ、あとを心配してついていく。

「提督がここに来た理由は存じ上げませんが、わたくしは望んでここにきました。たとえ世界を見ることができなくても、素敵なことをまだ感じ取れますもの」

楽しそうに言う熊野は立ち止まり、海に体を向けてゆっくりと歩き、波がわずかにかかる位置まで歩く。

「おい、あまり海に近づくな。危ないから――」

俺が彼女に近づいていくと、突然両手を勢いよく広げ俺に体を向けて微笑む。

その動きを見て近づこうとした足が止まる。

「提督、ここに来てからわたくしは幸せでしてよ？ 提督はどうなのかしら」

俺は問いに答えれず、時間の空白ができる。そのあいだ、熊野は足元で跳ねる海の音を楽しみ、段々と体が後ろに下がって海の中に近づいていく。

さらに注意しようとしたとき、熊野はバランスをくずして海の中に倒れる。

その姿は鎮守府で多くの艦娘を沈めてしまつたことを強く思い出してしまう。

作戦中の上からの突然な命令変更。結果、暗号がばれて、多数の艦娘が深海棲艦によつて失われた。数少ない生還者の艦娘たちは俺を強く憎んだ。俺は憎しみと責任と自己嫌悪に耐えられなくなり、異動を願い出た。

あれは俺が望んだことじゃなかつたんだ。そう思つても感情を込められた”目”から逃げることはなく、いつまでもその瞬間の記憶が脳にこびりついている

そして今。また海に沈んでいく艦娘が一人、目の前にいる。

俺はもうなくしたくないんだ。

「熊野！」

海に熊野がのまれるのを見た瞬間、杖とバケツを放り投げ急いで熊野の元に駆け寄り、海の中から体を抱き起こす。

すぐに海水で濡れた全身を確認し、怪我も何もないことを確認して一安心する。

上着のポケットから出したハンカチで熊野の顔を拭いていると、熊野は俺の顔を両手で首筋から上に向かつて手でなぞつていく。

「危ないことをするんじやねえよ、バカか！ 小さなことでも大事にな——」

「泣いていますのね」

いつのまにか俺の目から出ていた涙の厚い感触を、熊野は海に濡れた冷たい指でぬぐつてくれる。

そして、そのまま手を首にまわして俺の胸元へ抱きついてくる。「貴方の苦しみ、この熊野にわけてもらえるかしら」

心配する優しげな声を聞いて熊野に苦しみや弱音を吐きそうになるのをグッとこらえ、熊野の麦わら帽子が流されていたので俺の麦わら帽子を熊野にかぶせる。それで一度は心が落ち着いたが、熊野に悲しまれると気分が悪い。それをこまかすために熊野の体を勢いよくお姫様抱つこで持ちあげる。

「おりやあ！」

「きやー。」

「お前はなあ、自分のことだけ考えていればいいんだよ！」

熊野を抱っこしたまま、ぐるぐると無駄に体を回転させながら砂浜に上がり、先に地面へ倒れてから腕の中にいる熊野を雑に転がした。

荒い呼吸をつきながら、仰向けて夏の空を見上げる。

そうして落ちつくと、熊野に心の重さを心配してもらつたからか、気分がすつきりしていることがわかつた。

【提督】

横に転がっていた熊野は俺に手を伸ばし、胸に手を当てて静かに言い始める。

「この熊野、目は見えなくとも耳があります。耳で聴いて、耳で呼んで、耳であなたを感じ取ります。だからわたくしをあなた的好きなよう——」

熊野の頭を力強く抱きしめ、続く言葉を止める。

そのあとに続く言葉は想定できる。『自由に体を使つていい』ということを。

そんな言葉を言わせたくない。それではダメなんだ。熊野を傷つけたくないし、俺はただ熊野との平穏で退屈な日常があれば、それでいいんだ。

ここに異動されるとき、同僚の提督からは『提督人生、終わつたな』と言われた。

だが、こんな辺鄙なへんびところで生きるのも面倒な場所でも俺たちは楽しく生きようとしている。心に傷を負った提督と目が見えない艦娘の、たつた二人だけの海軍勤務。

誰からも見捨てられたと思うような、この地の果てで。

世界の果てで熊野と暮らした1カ月

俺と熊野が軍の監視所に来て4週間。今は8月のはじめになつたばかり。

世界の果てともいえるこの場所に本格的な夏がやつてきた。
先週までは海からの風が涼しくもあつたが、今では太陽の光は痛みを感じるだけだ。

たつた1週間で結構変わってしまった。

そんな暑い日々を、それぞれ別な鎮守府から不幸な出来事で飛ばされてきた俺と熊野の2人は、監視の目もなく気楽に生きている。
とは言つてもこつちに来てからの仕事は業務日報を書き、非常時に電話するというだけだから仕事をやろうとしてもできないのだが。
仕事が少ないことは楽だがやることがないと精神がダメになつてしまいそうだ。

けれど軍の仕事が少なくとも、生きるための仕事はある。
今的生活環境をさらに良くする、ということだ。

軍からの給料も補給物資も常に遅れてくるから、なおのこと自分たちでできることをやらないと死んでしまいそうだ。

だから俺は晴れていも涼しい朝の5時から畠に来て草取りをしている。服は動きやすいジャージに軍手だ。

畠の手入れをサボつているとすぐに雑草がもこもこと出てきて、あつという間に伸びてしまう。

毎日のようすに雑草を抜くのは面倒。

一時期、耕さず草も取らず肥料もやらないという自然農法をやろうとしていた。

でも熊野が『野菜はたくさん食べたいのですけど?』と言つたからそれはやめた。

自然農法というのは味がよくなるが、収穫量が少ないらしい。

……ここにきてから俺もずいぶんと農業知識がついたが、読書好きの熊野はさらに詳しくなった。

段々と食事に関して主導権を取られていくことを悲しく思いながら

らも、汗を流しつつ、しゃがんで手で雑草を抜いてく。

色々思うことはあるが、まずは目の前の仕事を片付けないといけない。

早く終わらせて朝飯でも食おうと集中しはじめたときに、家兼監視所となつてゐる建物から扉が開く音が聞こえてくる。

その音に反応して振り向くと熊野の姿があつた。

いつもならまだ寝ている時間なのに制服をしつかりと着て、ポニーテールの髪は俺が結んでないためにぼさぼさになつていて。杖を地面につき、視覚障害で目が見えない熊野は、目を閉じたまま立ち止まつていて。

周囲の音を聞いてから俺へと顔を向けてきた。

「こんな朝早くからどうした」

「なんとなく日が覚めましたの」

熊野に近づき、表情を見るが体調が悪いようには見えない。本当にきまぐれで起きてきたようだ。

「なにか手伝えることはないかしら？」

疲れるし汚れる畠仕事はあまりやらせないように考えていたが、そつまで言われると手伝つてもらいたくなる。ただ、今は雑草取りだけだから見えないとやりづらいだろう。

「ないな。だから戻つている」

「ではあなたのそばにいさせてくださいな？」

甘い声を出してくる熊野に、いつもなら理不尽なこと以外では俺の言うことを聞いてくれるが今日は違う。

無理に家へと帰そうとしたが、熊野にもなにか考えがあるかもしない。

「そこで待つていてくれ」

すぐに家に入り、椅子と麦わら帽子にタオルを持ってくる。

日陰がある家の軒下に椅子を置くと、熊野の正面へ行つて手を胸の前へと差し出す。

「熊野」

そう声をかけると、熊野の手が俺の前でさよつてから柔らかい手

が俺の手を掴む。

「どこへ連れていくつてくれますの？」

楽しそうにいうその言葉に返事をせず、ゆっくりと椅子の前へと連れてくる。

熊野の手を俺から離し、椅子に触らせた。その瞬間に不機嫌になつた熊野は持つていた杖で、コツンと俺を軽く叩いては椅子に深く腰掛けた。

次に麦わら帽子をかぶせ、タオルを手に持たせる。

「夏の朝を楽しんでくれ」

「……思い切り働いてくるといいですわ」

俺から離れることになり、座つてているだけということが不満らしく低い声で文句を言つてくる。

麦わら帽子の上から頭をぐりぐり撫でると、ペシペシと何度も手を軽く叩いてくるのがなんとも可愛らしくて笑みがこぼれてしまう。

俺に触られた麦わら帽子の位置を細かく直す熊野を見たあとに俺は疲れる雑草取りを再開する。

——ずっと草をむしっていて思うことがある。

自分が食べるためには煙の世話をすること、人間関係を気にすることなく好きなことができる。

そして熊野とふたりつきりで静かだけど楽しい時間を過ごすことには、もしかしたら贅沢なことなんじやないかって。

ここに来てから給料は下がつたし上下水道も不便になつたが、その不便さもいいかもしねりない。

出世の道が閉ざされたから軍に気を使わなくともいいし。

考え方をしながら黙々とやつていると汗がだらだらと流れていることに気付き、日陰の下にいる熊野の隣へと移動する。

「あちい……」

「お疲れさまです」

熊野が手探りで俺の顔へとタオルを押し付け、汗をぬぐってくれる。その優しい拭き方に心が癒された。

わずかずつ体が冷えてくるなか、煙をぼーっと眺めていると熊野が

嬉しそうな声を出してくる。

「働いた男の人の汗というのはいいものですわね」

「そういうものかね」

「ええ。特にわたくしのためにというのが」

「おい」

小さく声をあげて笑う熊野に釣られ、俺も声を出して笑つてしまふ。

それからは熊野とこれから畠をどうするか会話をした。

途中、会話が楽しくて水を飲みたくなるのを我慢していたがどうやつて気付いたのか、熊野に怒られて一緒に家へ入る。

そのあとは井戸から汲んだ水で体を洗い、熊野が作ってくれた朝食を一緒に食べた。

◇

朝食を食べたあとは家の内で一步も外を出さずに点字や視覚障害について勉強をし、のんびりと過ごしていた。

そのあとに熊野が『今日は月が見たい気分ですの』と言つてきたので夜に行く約束をした。

風景を見ることができない熊野が『見たい』というのは時々あり、大体の場合には気分転換に行きたいという意味だ。

照れ隠しなのか、そういう言い方が好きなのかはわからない。

そして月が出ている夜となつた今。

砂浜から見上げる空は雲はほとんどない。

まんまるに近い月が夜空に浮かんで柔らかい月明かりが降り注いできて、海からはざざーんという心地よい波音と風がよく聞こえてくる。

杖を持つた熊野は俺より先に歩き、砂浜をぐるぐると歩きまわつて

はお気に入りの場所を探している。

俺はというと、ふたりぶんの毛布を持つて熊野の後ろをついていく。

「ここにしましようか」

「おう」

海から少し離れた場所に座った熊野へ毛布を手渡し、人がひとり入るほどの距離を置いて俺も座る。

お互い毛布に包まり、寒い海風が吹くなかで見るのは月だ。でも寒いものは寒い。

服装は昼間に着ていたジヤージから、熊野に軍服に着替えて欲しいと言われたとおりにしている。

なぜそんなことを言つたのか、教えてはくれなかつた。そのうちに熊野が言つてくれるだらうと思つて静かに月を眺めている。

10分ぐらいしたときだ。

熊野が毛布に包まつたまま、俺のすぐ隣にやつてきて体を密着させてくる。

「寒いのか？」

「提督、そこは何も言わずには優しくするのが男のたしなみですわよ？」
そう言われるも、恋人でもないのに下手に優しくすると嫌われると思つて遠慮していたというのに。

そもそもこの場合の”優しくする” というのはどうすればいいのだろうか。

考へても何も思いつかず、そのまままでいると熊野の体が寒さで震えているのがわかる。

帰ろうというのは熊野が言う優しさにはあたらず、帰ろうと言つてこないことからまだ月が見ていたいと感じる。

足を開き、体に巻いていた毛布を外す。

「熊野、おいで」

優しく声をかけると、熊野は俺に体を向けて手で体や足を触つてくる。

足を開いていることがわかると、ゆつくりと足の間へと入つてきて背中全体を預けてきた。

くつついている俺たちに熊野と俺の毛布で体に巻きつけ、毛布のなかで熊野の体に手をまわして抱き締めるような形になる。
暖まりはじめた熊野と俺はまた静かに月と海を眺める。

ほんのりと熊野の髪の匂いを感じたとき、ふと気付く。

今日の熊野はやけに甘えてくることに。

昨日か今日になにかあつたかな、と考え事をしていると熊野が声をかけてきた。

「怖くなりましたの」

前を見ている熊野から寂しさを感じる声が。

「敵も来ないし静かなところじゃないか。不便すぎる生活だけど、それが楽しくもあると俺は思っているよ」

「おだやかに日々を過ごし、信頼できる提督がいるのは素晴らしいことです。けど、幸せ過ぎるのです」

熊野は俺の手に自分の手をあて、そつと優しく撫でてくる。

「今の生活が終わることを考えてしまつたとき、怖くなつたんです。また邪魔な艦娘として扱われるんじゃないかなって。目が見えない以外は普通の艦娘で、やめることもできないですから」

落ち込んでいる熊野に優しい言葉をかけてあげたい。

けれど、どういうことを言えばいいのだろうか？

いくつもの言葉をかけようとも熊野が考えている怖さをやわらげることすらも難しい。

『いざとなつたら俺がお前をもらいうける！』というかつこいいこともできない。

嘘をついてもいいとも思うが、俺はそれをしたくはない。

「月を見たいと言つてたよな。あれは今していることを期待してか？」

「それもありますけど……。こうでもしないと提督とくつつくことができないのですけど」

俺へと顔を少し向け、頬は月明かりでもわかるほど赤くなつている。

俺にとつて守るべき存在であり大事にする必要がある艦娘の前に、1人の女の子だ。ここに来てからの俺は対等の関係を望んでいる。

一度熊野の甘えを受けてしまうと、もう戻れなくなりそうだ。そうしたらこの関係が崩れてしまいそうで。

熊野が今の生活がなくなることを怖がっているが、俺も怖いことがある。

それは熊野に嫌われることと、失うことだ。今まで一緒に暮らしてきて、お互に大事な存在となりつつある。相手を頼り、自分が生きている意味を相手に見出す。

暖かい毛布を体から離し、もたれかかっている熊野を転ばさないようゆっくりと立ち上がる。

「熊野と仲良くしたいとは思つてゐるよ」

「そう、ですか」

落ち込んだ声を聞くと罪悪感で胸がいっぱいになつてくる。今すぐにも甘やかしたい。

だが我慢しなければいけない。俺と熊野のために。

そう誓つたばかりなのに、寂しげな背中を見ると心が揺らぐ。

「友達という扱いじゃダメか?」

「それってどういうことですか?」

不思議そうに顔を向けてくる。俺は何度か深く息をつき、説明をしようとするが口が開かない。杖と毛布を持つように言い、困惑しながらも言うとおりにしてくれた熊野の前に膝をつく。

そして膝と背中に手をあててお姫様抱っこをする。

何も言わずに突然抱きあげられた熊野は可愛い悲鳴をあげるが無視して歩き始める。

「わかつたか?」

「なにがです!?

「友達に会いに行くのは悪いことだと思うか?」

その一言を聞いて少しあとに俺の言いたいことを理解してくれたのか、幸せそうな笑みを浮かべてくれる。

俺が言いたいのはこうだ。

上司と部下という関係だが、友達になつてしまえば話は簡単になる。

たとえ離れることになつても友達なら会いにいけるし、堂々と触れる。あうこともできる。

もしかしたら俺がわがままを言つて引き取ることができるものかもしれない。

それと艦娘と友達になるとはつきり言えば、物珍しさに協力してくれる人が出てくるだろう。

大部分は楽観的希望。嘘に近い。

だけれど熊野は俺の言葉を信じてくれる。

俺の胸に感じる熊野の柔らかな感触と暖かい体温。すぐそばにあるというのが答えなのかも知れない。

世界の果てで黒髪ワンコと遊んだ日

8月はじめの小ぶりな雨が降っている日の午前10時。

外で農作業はできないが育てているニンジン、芽キャベツに小松菜の野菜たちが雨にあたつて成長する姿を想像し、朝食が終わって暇していた俺と熊野は1階でのんびりと過ごしていた。

湿気で蒸し暑くなるが、窓を開けているとひんやりとした空気が入ってくることもある。

特にやることもなかつた俺と熊野はそれぞれソファーに座り、自費で注文して昨日届いたテーブルを挟んでお互に向き合つていた。いつもの穏やかな空気ではなく、どこか緊張している。

原因是目の前にある物だ。

それは大回転オセロ。

これもテーブルと同じく昨日届いたものだ。

普通のオセロとは違い、盤面の上にあるマスに石が内蔵されている。

その盤面の上にある石を回転させると、白や黒の色に変わる。白と黒はそれぞれ刻まれている模様が違うため、目が見えない熊野と一緒に遊ぶことができる。

今の戦況は俺が角1つを取り、やや優勢。

これはもう勝ったな、と思う俺。

向かいにいる熊野はこわばつた顔で置いてある石を、手でいくつか触りながら考えている。

熊野が次の一手を思いつくまで俺は部屋を見渡す。

一緒に暮らし始めて段々と私物が増えていき、俺と熊野しかいないこの場所も暮らしやすくなってきた。

目が見えない熊野とも関係がよくなつたし、野菜を育てるのも樂しい。

前にいたところでは多くの艦娘たちと仕事をしていたが、今では仕事がなくても寂しくはなつてない。ならないように意識している。

「提督？」

「なんだ」

「次は提督の番ですわよ」

盤面を眺め、黒である熊野が角を取らずに多くの石をひつくり返していた。

オセロ初心者である俺は角さえ取ればいいと思っていたが、他に勝つ方法なんてあるのか。

今まで艦娘とこうやつて遊ぶことなんてなかつたから、こういうのは熊野のほうが強いか……。

ぐぬぬ、と無い知恵を絞つて熊野の目的を考えていると、熊野が窓へと耳を向ける。

「小さな足音が水たまりをじやばじやばと歩いてきますね」

「足音？」

俺も熊野と同じ方向へ耳を澄ますが、雨の音しか聞こえない。

そのまま10秒ほど聞いていると、水たまりを跳ね除けながら歩いてくる音が聞こえる。

今日は来客の予定はないし、軍や民間に頼んだ荷物が届く日でもない。

足音が近づいてくるのを待つていると、開いた窓から姿が見える。ここに向かつてくるのは小さい女の子だ。

その子は雨だというのに白いワンピースを着ていて、手にはピンク色の傘と野菜を入れたビニール袋を持っている。

熊野はソファーに置いてあつた杖を持つと入口へと行き、その子がやつてくるのを待つてているようだ。

後ろ姿からわかるほど嬉しさが見え、そわそわとしている。

少ししてノックの音が聞こえると、待ちかまえていた熊野が扉を開ける。

「おはようです、熊野お姉ちゃん！」

「いらっしゃい、麻衣ちゃん」

「はい！ おじさんもおはようです！」

「おーう」

俺は声をかけられ、適当に返事をする。

麻衣という女の子は町でやっている八百屋の1人娘。熊野を連れて買い物に行つてゐるあいだに仲良くなつていた。

明るく元気な声の持ち主は麻衣という小学五年生。

140cmほどの身長で小柄な体。

ところどころ雨で濡れているといふのに黒髪は犬耳のように跳ねており、他は肩まで髪がまつすぐ伸びている。艦娘の時雨を小さくして元気にした感じだ。

そんな様子から俺は”ワンコ”と呼んでいる。彼女からは嫌がられているが。

熊野のことは”お姉ちゃん”と呼ぶが、俺のことは”おじさん”と呼んでくるのが悲しい。若い子から見れば20歳以降はみんなおじさんなのだろう。

ソファーへと向かう熊野の後を追いながら、初めてくるこの場所に興味津々とあたりを見回している。

俺は立ち上がりつつ彼女から傘を受け取り、野菜が入ったビニール袋を取ろうとしたがにらまれたのであきらめた。

今は邪魔でしかない存在の俺がいなくなると、部屋の中を見ることに集中しすぎてつまづくも、体勢を崩しながら熊野の胸元へと倒れこんでソファーへと座つた。

熊野が俺の顔へと申し訳ない、というような表情を向けてきたのでもセロを続けるのは断念する。

濡れた傘を傘置きへと入れ、棚から清潔な大きいタオルを手に取るとワンコの後ろへと回り込み、問答無用で髪をわしやわしやと拭き回す。

「うきやー！」

「黙つて拭かれてる」

「お姉ちゃん、おじさんにセクハラされてる!!」

「このおじさんは大丈夫ですから安心してくださいな」

楽しげに叫びながら熊野に抱きついて助けを求めるが、熊野もくすくすと小さく笑いながら声をかけている。

しかし、熊野におじさんと初めて呼ばれた。

そしてすごくショックを受けるのはなぜだろうか。あれか、小さい子と成熟しつつある女性の違いか。言葉の重みっていうのは。

「熊野、タオルだ」

少し気分が落ち込みながらも拭き終わると、熊野の手へとタオルを渡す。

受け取った熊野は、彼女の服を触りながら濡れているところをタオルで拭いていく。

熊野に会いに来たであろうワンコのことを考えると、ふたりきりにさせたほうがいいよな。そしたら俺は読書か仕事でもするか。

「おじさん、これお母さんから！」

これからをどうしようか考えていると、熊野に拭かれ終わったワンコはソファーから飛びはねるように立ち上がって俺へと野菜が入ったビニール袋を渡される。

「ありがとう」

それを持って冷蔵庫へ行き、しまいながら野菜の種類を確認する。

水菜、ニンニク、バジルの3種類だ。

小学生の女の子が持てる量だから多くはないが、なぜにこういう組み合わせにしたのだろう、ワンコのお母さんは。

水菜はサラダに使えるからいいけど、ニンニクはバジルなんてそれ単品では使えないじゃないか。

もらえるのはありがたいからいいけれど。

まあ、料理は熊野に任せているからなんとかしてくれるだろう。

野菜をしまい、ふたりの元へ行くとワンコがオセロに興味を持つて触っていた。

「遊ぶか？」

「いいの!? 熊野お姉ちゃん、あそぼー!」

「では反対側の席へ移動してくださいな」

「はーい」

自然に俺を無視し、熊野にニコニコと笑顔を向けて喜ばれるともう寂しさなんてものは感じなくなる。

「俺は仕事してるからな」

「こんな可愛い子が来たからやる気が出ましたか？」

からかう笑みに対し、熊野の髪をぐしゃぐしゃに撫でて仕返しをしてやつた。

熊野は困ったような笑みを浮かべ、ワンコは俺のところへ走つてきては全力で蹴りまくつてくる。

逃げるよう執務机へ行くと、ワンコは俺へと可愛らしく舌を出して挑発して熊野とオセロを始めた。

椅子に座り、机の上にあるのは連日にわたつて悩んでいるもの。熊野専用の艦装改修案だ。

目が見えない熊野のための対水上用戦闘装備を考え、海軍の偉いさんに作つてもらおうと考へていて。

熊野専用ということにしてしまふと読んでもらえないのは確実なため、目が見えない艦娘用としている。

1つめは目が見えないから、数で補おうかと12・7cm砲を大量搭載というのも考えたがそれだと近距離戦闘になるのは大変だ。

2つめは次に対空砲弾である三式弾だけを搭載とも考えたが、时限式では目が見えないと爆発させる時間をセットできない。

両方の案をきちんと効率や戦いかたを考えたが、どうにも図上でさえもうまくいかない。

問題は距離や方向がわからないことだ。

熊野の耳だけでは足りない。

電探を装備し、距離や方角を音にすればいいとも考えた。だがヘッドホンにしても距離と方角を1つだけではとても聞き分けづらい。両方をつけると今度はそれ以外の音が聞こえなくなる。

いい考えが思いつかず、机の引き出しから何度も読んでしわしわになつてゐる艦娘艦装カタログを引っ張りだす。

自分の頭の悪さに落ち込んでいると、いつのまにか熊野とワンコが机の前へと來ていた。

「どうした？」

「麻衣ちゃんがわたくしたちが暮らしている2階を見たいと言つてい

まして

少し困った顔の熊野の隣には、田をきらきらして良い返事を待つて
いるワンコの姿が。

2階には軍の機密となる資料はなく、ただ俺と熊野が暮らしている
生活空間があるだけだ。

熊野のために普段から家具の配置や物は綺麗に片づけているし、危
ないものもない。

「熊野がいいなら俺は構わないよ」
「さすがおじさん！　いい男だね！」

俺の返事を聞くと、すぐに熊野の手を引つ張つて2階へと行く。熊
野は「あらあら」と困った声をあげるが、楽しそうな顔をしている。
普段は俺としか遊ばないから、熊野も楽しいんだろうな。

2人のうしろ姿を見送るとき、熊野は階段につけられた手すりを持
つてゆっくり上がる。ワンコは熊野を気遣いつつ静かに熊野の後
ろからついていくとすることをしていた。

あの気遣いはすごいと驚きつつも、少しは俺に対しても優しくして欲
しいだなんて思う。

そして2階から聞こえてくる楽しげな2人の声。
そんな声を聞いて思いつく。

音だ。

熊野用の艦装に音がわかる聴音機をつけようと思い、カタログをめ
くる。

駆逐艦用の水中聴音機を魔改造して取り付けようと思つたが、何か
思つてゐるのと違う。

それに水中用だと水上で使つてもいまいちだろう。
何かが頭にひらめきそうだと思い、思考を深くするため天井を見上げる。
上からはギシギシと音がなり、走り回っているのがわかる。

……空中だ。

頭にひらめくは、陸軍が使つてゐる空中聴音機。
それなら水中用のよりも楽に改造できるはずだ。

音だから電探と違つて逆探される心配もない。

問題は音だから、気象条件で大きく左右されることと音が聞こえるまでは時間がかかり誤差がある。

そのあたりの問題解決は資料を取り寄せてからでもいいかと思う。

問題解決の見通しが立ち、悩みがなくなるのはとても気分がいい。

疲れた頭にコーヒーを飲むかと思つて時計を見ると時刻は午前1時。

お昼も近く、たまには熊野の代わりに飯を作つてやろうかと思つて台所へと行く。

今の俺は気分がよくなんでもできそうな気がする。

——普段できないことをできると考えたのがおかしかった。
料理を始めた俺が得た輝かしい答えだつた。
なのでサンドイッチを作ることにした。

使う野菜はワンコが持つてきた水菜、ニンニク、バジルの3つ。ワンコのお母様、野菜の選択に文句を言つてすみませんでした。

心の中で静かにワンコのお母様に感謝をしつつ、ニンニクをすりおろしてバターと混ぜる。その混ぜたバターをパンに塗つてオーブンで焼く。

香ばしい匂いが広がり、上手に焼けたパンを取り出して刻んだバジルと適度な大きさに切り分けた水菜を乗つける。

オニオントーストの刻みバジル水菜載せが完成する！

我ながら惚れ惚れするほどのいい匂いと綺麗な外見だ。

3人分できるころには上から2人が降りてきた。

「熊野、ワンコ、飯にするぞ」

「提督が作つてくれた料理、楽しみですわ」

「……えっと、わたしも?」

「おう。遠慮すんなよ。これはお前が持つってきたものを使つたんだからな」

ここで食事をもらうというのは考えていなかつたらしく、断りそうな雰囲気を前もつて壊していく。

ソファーに座り、トーストと牛乳のぱつと見てシンプルすぎる昼飯を食つた。

ワンコは俺にも笑顔を向けてくれるようになり、嬉しい。

小さい子には食べ物が1番じやないかと考えた昼。

食べ終わつてお腹が落ち着いた頃にワンコは帰るといつた。

夏休みの宿題が終わつてないからゆつくり遊べないと説明してくれたが、俺が小さい頃は宿題なんてものは最終日に終わらせるものだつた。

これが時代の違いなのか。熊野といちやいちやしている時の印象とは違つて真面目さんなのか。

熊野は心配して家まで送るというが、逆に目が見えないと雨の日は危ないと言われて落ち込んでいた。

落ち込む熊野を見るのは新鮮だつた。

帰つていくワンコに軍支給の缶づめをビニール袋に入れて渡し、俺と熊野は一緒に並んで入口から見送つていた。

傘を差して道をまつすぐ歩いて帰つていくワンコが角を曲がり、姿が見えなくなつた時に俺は思う。

「ああいう子供を守るために俺たちは戦つっていたんだな」「それは違いましてよ？」

不思議そうな顔の俺に対し、熊野は自信たっぷりに言う。

「今も守つています。そのためにわたくしたちがここにいるのです」

その言葉を聞いて衝撃を受けた。

俺は無意識で、こんな辺鄙な場所では誰かを守ることなんてできな
いと思つていた。

けど熊野は違つた。

目が見えなくても守る意思は強い。

思えば、今までの行動でも熊野は前向きに生きている。

一方の俺はここで一生が終わりそうだと思つて、前向きでもなく過
ごしていた。

俺が提督になつたのは人々を守るためだつたといつたのに。
「提督、自分を責めないでください。わたくしだつてすぐにこんな考

えができたわけではありませんの」

「そうなのか？」

「目が見えなくなつてから、自分が何のために戦つていたかを考えることができました。自分に失望するのは早すぎますし、わたくしの考え方がた正しいというわけではありません」

熊野は俺に体を向け、頬を優しく撫でてくる。

そうされると不思議と心が落ち着いてくる。

「あなたはあなたの答えを見つければいいんです」

熊野のおだやかな声で言われ、頭がすつきりとする。

自分で決められるのは自分だけということか。

けれど、俺のほうが年上で人生経験もそこそこのに熊野のような若い女の子に言われると恥ずかしくなる。

恥ずかしさを抑えるために、熊野の髪をぐしゃぐしゃと撫でまわしてぼさぼさにして満足して家へと入る。

後ろからは俺を恨む言葉を楽しげにいう熊野の声が聞こえてきた。

世界の果てで熊野と暮らした1か月と2週間

半分の月が昇る夜空のしたで、夜の見回りを終えた俺は監視所兼住居へと戻ってきた。

海から吹いてくる風が夏だというのに肌寒さを感じる。

制服の上に着ている薄いジャンバーはやはり手放せないと服の偉大さを実感しながら、持っていた懐中電灯の明かりを消して扉を開ける。

部屋には明るい電気の照明がついていて、ソファアでは制服姿の熊野がいて本を読んでいる途中だった。

「おかえりなさい」

「ただいま」

本を持つた姿勢のまま、俺が扉を開ける前から振り向いていた熊野と夜の挨拶を交わす。

こういうやりとりをするたびに、今日も仕事が終わつたという充実感がある。

信頼できる人がいて、帰りを待っていてくれるというのはなんだか落ち着くものだ。

「寒い中、お疲れさまでした。温かいコーヒーハーを飲みますか？」

「頼むよ」

読んでいた本をテーブルに置いて熊野が立ちあがると、台所へと歩いていく。

入れ替わりに俺はソファーに深く座り、懐中電灯と着ていたジャンバーをテーブルの上へ投げるよう置く。

深い息について、今日の仕事も終わつたと一安心する。

けど、こんな見回りだけでいいのかと今の仕事に少しの疑問を持つ。

もつとも他にできることはないし、見回りも重要な仕事だ。

勝手に落ち込みはじめる思考を振り払い、台所にいる熊野のうしろ姿を心配しながら眺める。

なぜなら熊野はコーヒーを一杯作るのを苦労しているからだ。

目が見えないと水の量もうまく淹れられないし、お湯がはねたとき
に驚いてヤカンを落としたこともある。

だから俺はすぐにでも飛んでいけるような心構えをする。

熊野は俺の心配を知らずに気分良さげに棚から計量カップを取り
出し、いっぱいに水を入れる。

普段から同じ場所に置いてあるガスコンロへと手を伸ばしてヤカンの位置を確認すると、水を入れて火をつける。

この時点では俺はもう緊張で苦しくなっている。

熊野を信頼していないわけじゃない。怪我がしないかと心配だ。

熊野が怪我しないならヤカンでも計量カップでも壊していくと思うほどに。

お湯が沸くのを待つあいだ、視線に気づいたのか俺へと振り向いて熊野が困ったように微笑む。

「そんなに心配なさらないでください」

「怪我はしないでくれよ？」

「今日こそはできる気がします」

失敗せずにコーヒーを淹れてくれたことは一度もない。

不安しか感じないセリフを聞いて、すぐそばで見守りたいがそうしてしまふと熊野の成長を止めてしまう。

とても苦しい思いで熊野から視線をはがし、目をつむる。

——聞こえてくる音は虫の声。

外で見回りをしていたときは虫の声が聞こえていたのに、戻つてからはそんな音を感じる余裕がないほど緊張していたことに気付く。

その音を聞きながら心を落ち着けていると、熊野がドリップ式コーヒーのパックを探してマグカップに設置する音が聞こえた。

少し時間が経ち、お湯が沸く音が聞こえはじめる。

目を開けておそるおそる熊野を見ると、手にミトンをはめてお湯が沸くタイミングを待つていた。

難しい顔をし、いつヤカンを取ろうかとしているのを見るとつい笑みが出てきてしまう。

今は集中しているためか、俺の生暖かい視線を気づかずにはヤカンを

取るとマグカップの上へと持つていく。

慎重にペーパードリップへとお湯をちよろっと注ぎ、それがしつかり入ったのを音で確認したあとにもう少し入れて蒸らす。

片手をマグカップにあて、ヤカンを傾けてゆっくりとお湯を入れていく。

溜まつていくコーヒーの温度を、手で感じることで入っている量を確認しているみたいだ。

慎重に入れる作業が終わるとヤカンをコンロの上に置き、ペーパードリップを外してゴミ箱へ捨てる。

コーヒーを淹れる作業が終わると、熊野はやりきったという表情と共に大きく息をつく。

それを眺めていた俺も大きく息をついて安心する。
いつのまにか俺までが緊張していたらしい。こういう気持ちは、親が子供を見守るような気分なんだろうか？

あとは俺のところまで持つてくるだけだから、もう安心してもいいだろう。

熊野を見ているとまた怒られるだろうからテーブルの上に置いてあるものをどけて座つているのと反対側のソファーアーに置き、天井を見上げてやつてくるのを待つ。

普段よりも慎重な足取りで熊野がやってくる。
「提督、テーブルの上を片付けて欲しいのですけど」

「もう終わつた」

「あら、それはありがとうございます」

感謝の言葉を言うのなら、むしろ俺のほうだと言いたいがゆっくりとテーブルの上にマグカップを置こうとする熊野を見て、喋るのをやめる。

ことり、とマグカップが置かれる音がすると熊野は俺へと手を伸ばしてくる。

そのまま待ついると俺の体に触れ、そのまま体をくつつけて隣に座ってきた。

熊野は俺に顔を向けると、とても満足そうな顔をしている。

「この熊野、コーヒーをしつかりと淹れることができましたわ！」

「声がうるさい」

初めて成功したコーヒーでテンションが上がっている熊野に文句を言いつつ、マグカップを手に持つてコーヒーを口の中で転がすようにして飲む。

隣にいる熊野から緊張の気配がするのを感じながら、入っている量が少ないコーヒーを口の中でじっくりと味わつて俺は感想を言う。

「苦すぎる」

「そこは『とてもおいしいよ』とか『さすが熊野だな』というシーンではありますん？」

「正直な男が嫌いなのか、お前は」

そう返事をしてマグカップをテーブルに置くと、熊野は俺の太ももを軽くパシパシと何度も拗ねたように叩いてくる。

しばらく放つておいて、おとなしくなったあとにコーヒーを飲んでいく。

「次もまたコーヒーを淹れてくれ」

「……おいしくなくても？」

「おいしくなるまで俺は熊野のコーヒーを飲むよ。おいしくなつても飲むけどね」

空になつたマグカップを熊野の手に持たせ、頭がすつきりしたことでシャワーを浴びる前にもう一仕事をしようというやる気が出てくる。



2階に行き、昼間に町へ行つたときに古書店のじつちゃんからもらった銃を手にする。

理由は俺が気にいつたと言つていたが他にもなにかありそうな気がしたが、疑問を頭の片隅に追いやつて細長い袋に入った銃と汚れ拭き用のタオルを持って1階に下りていく。

マグカップを片付け終わつた熊野はさつきと同じ位置に座つて、そこから距離をちょっとあけて隣へと座る。

テーブルに銃を置き、袋を開けるとそこには古びた銃が1丁と8発

の弾があつた。

「それはなんですか？」

「昔の銃。古書店のじつちゃんがくれるつていうから喜んでもらつたんだよ」

「ああ、あのおじいさまですか」

じつちゃんから説明を受けたときに、銃は昔に狩猟のために使つていたものだという。

その銃は13年式村田銃という単発ボルトアクションを猟銃に改造した、30番（12.3mm）の弾薬仕様のものという説明を受けた。

隣を見ると、熊野が興味を持つているらしくそわそわと落ち着きがない。

俺は金属薬莢の弾をひとつ取り、タオルでしつかりと磨く。

「手を出して。弾を渡すから」

汚れがないのを確認し、俺の体へ嬉しそうにくつづいてききた熊野の手に弾を置く。

熊野は弾を手の上で転がし、想像していたのより弾が大きかつたらしくて興味深げに触っている。

俺は銃を手に取つて状態を確認する。

思つていたよりも綺麗で表面にはヒビや傷、汚れが少ない。

丁寧に手入れをしていたのがわかる。こんなにも大事にしていた銃を俺に渡すなんて、本当にどういう理由だつたんだろうか。

「大事にされているこの銃を、なんで俺なんかにくれたんだろうな」

熊野は手で転がしていた弾をテーブルの上に置き、あごに人差し指をあてて考える。

「……あのおじいさまはおひとりで暮らしていましたか」

「87歳なのに良く働いて、頑固で義理人情に厚いって居酒屋のおつちやんたちが言つてたな」

「食堂のおばさまたちから話を聞いたことがあります。妻は先にお亡くなりになり、遠くで暮らしている子供たちとも仲が良くないと」

俺と熊野が聞いてきた話を合わせると、俺に銃をあげる理由が足り

ない。

この銃はよく手入れされている。ボルトアクションの部分はやや動かしづらいが、全体的に綺麗な状態だ。

「銃をくれたとき、父親からもらつて自分も使つていたつて言つていたな」

「それは大事にしないといけませんね」

熊野は弾をテープルに置き、銃に興味があるらしく俺へと両手を差しだしてくる。その手に俺はゆっくりと銃を渡す。

「重いぞ」

熊野は銃を受け取ると、愛おしそうに撫でていく。

「ずいぶんと古いですが大事にしているのがわかります」

「でもさすがにもう使えないって言つてた。銃身の内側は錆が出ているし、部品も弾薬も今では手に入らないって」

親子二代にわたつて使い続けた銃。

今ではもう使えないが、それを俺に渡した理由を考える。
単純に処分に困つて俺へと渡したという可能性もあるが、俺が受け取つたときはとても晴れやかな顔をしていた。

あのじつちゃんとは話をしたり、将棋を教えてもらつたり、時々は店で買い物をしたぐらいだ。日曜大工もしたかな。

寂しさをまぎらわせてくれた、息子のように思つたという理由であげたのだろうか。

【提督】

「あー、なんだ?」

「提督の考へてゐることとはきつと間違つてゐると思ひます」

口に出していないので、熊野は俺の考へを違うと言つている。

なら、他になにがあるというのだろう?

続きをの言葉を待つていると、熊野は俺に銃を返してきたのでそれを受け取り、もう一度銃を眺める。

「提督はおのじいさまと仲がよろしかつたですわよね?」

「あのじつちゃんといふときは楽しかつたな。行くたびに歓迎されて茶も出してもらつたり」

バカ話をしてくるときを思い出すと、自然と笑みが浮かんできてしまう。

「人に物を送るときほどのような感情がつくのでしょうか？」

熊野に言わされて考える。

嫌がらせ、自分を気にいってもらいたい、機嫌をよくしてもらいたい、自分と同じ趣味を知つてもらいたい。他にもあるがどれも違う気がする。

じつちやんが俺にくれた時のあの表情はなんだつた？

過去を懐かしむような、孫を見るような優しい目。あれは俺が喜ぶ姿を見たかったのだろうか。

唸り声をあげて悩んでいると、熊野があきれたため息をついてくる。

「あなたはいつも難しく考えすぎです。あのおじいさまは自分という存在を覚えてもらいたかったということもあります。むしろ、わたしにはそれしか感じません」

「そこまで断言できるのか？」

「はい。おじいさまも、その父親も使っていた大事なものです。銃という物や金銭的価値よりも重要なのは意思是です。代々使ってきたという意味はどういうものでしようか？」

それは家族の絆、または信頼。

熊野に言われて納得する。

じつちやんは俺を信頼してくれたのだ。

まだこの場所に来てから1ヶ月ちょっととした経つてない俺のことを。

「言いたいことは言葉で言えばいいのにな」

「言葉よりも、時にはそこに在るだけで何百何千の言葉の代わりになることもあります」

そういう考え方もあるのか。今度じつちやんに会つたらなんでもくれたのか、と聞こうとしていたがそれはあまりいいことではないかも知れない。

しかし、熊野はよく考えている。

読書好きでゲーテや哲学書を好んでいるということもあるからか。俺がずれている考え方をしているときには、こうやつて助言をしてくれる。熊野の存在は、言葉がなくてもそこにいるだけで俺は心が落ち着く。

……ついさっき熊野が言っていたことを思い出す。

物がそこにあるだけで言葉の代わりになるというのなら、すぐ隣に大事な人がいるということになるのだろうか。でもそれをちょっとと考えただけでやめる。

すべての行動、意味を理解しようとするのはつまらない。

考え続けるということが大切なのはと思い、隣に熊野がいることはもしかしなくともと幸せなのだと感じる。

こんな女の子は、外見も性格も素敵すぎて俺にはもつたいないぐらいいだ。

閑話　世界の果てで鈴谷と出会つた3時間

8月も終わろうとする最後の週。

真上から照りつける太陽の下、送つてもらつた軍の輸送トラックから降り、深い森の中で3kmの砂利道を歩いてきた俺は小さくため息をつく。

歩く道が延々と続くような思いに捕らわれたのは間違いではないだろう。意識がぼーっとするなかで、まっすぐに延びる道と木々と木製の電柱だけの道。

手で額の汗をぬぐい、夏用の白い軍服には汗が染み込んで肌にべたついて気持ち悪い。

不快な思いをしてまでたどり着いた目的地は海から遠く、山の中にある場所だ。そこで目にうつる景色の色は緑ばかり。

ここは人の気配がまったくなく、深く生い茂る木々で囲まれている森の中。

そして目の前には、ぽつんと切り開かれた場所で錆びた鉄条網と小さな鉄門がある。そこが俺の新しい職場となる整備基地だ。

だが、整備基地とは名ばかりで門から見える光景はいくつかの倉庫と住居がひとつあるだけだ。敷地内も雑草が多く生えていて仕事をする前から気を削いでくれる。あまりにも辺鄙な場所で少しばかり落ち込んでしまいそうだ。

「こりや、廃墟と言つてもいいぐらいだわな」

そのなかでも俺は良いところを探す。それは空気が澄んでいること。煙も飛行機も砲弾も何も見えない、美しい青い空。それと心を圧倒するほどの森のざわめきと寂しさを感じる風の音。

まるで物語のような非現実的光景に現実感を少しばかり失い、視線が下に落ちていくが足元に自分と彼女の荷物を詰めた大きなバッグがひとつずつあるのを見て我にかかる。

隣にいる頭ひとつ分ほど背が低い彼女の様子をうかがうと、航空巡洋艦の鈴谷が制服の袖で顔の汗を拭つては失望した顔になつていた。彼女の外見は、肘まで長く伸びた薄い青色の髪で太陽の光があたつ

てきらきらと輝いている。茶色を基調とした上品さを感じられる服から見えるふくよかな胸。スカートとニーソックスのあいだから見える、すらりとした足は汗に濡れていて目を離しづらい艶やかさが出ている。

一瞬だけ鈴谷は俺と目を合わせ、また視線を前に戻しては溜息をつく。

鈴谷とはここに送つてもらう輸送トラックの中で出会い、一言の会話もなく2時間が経つ。

それもそのはず。

軍から渡された鈴谷のレポート書類を移動中にちらりと見た感じでは、鈴谷は音がかなり聞こえづらいと書かれている。

耳についての詳細まではまだ読めてないが、おそらく戦闘に必要な音が聞こえないため役に立たないが捨てるにはもつたいために送られてきたんだろう。

形だけとなつている第596整備基地。

人員は『提督』の俺と『艦娘』の鈴谷。この二人だけだ。

左遷されたもの同士、文明から隔離された場所で楽しく生きていくことうと俺は前向きに考える。鈴谷は今にも帰りたがっている雰囲気になつてているが。
大人一人分程度の高さがある鉄の門を開けるために近づくと、そこには鉄のプレートがくくりつけられていて文字が彫られている。
鋸びてやや見づらいその文字は『この門をくぐるものは一切の希望を捨てよ』とあつた。

溜息がつくほど実にやる氣ができる言葉だ。こんなのをつけるぐらいに見放されている場所つてことが。

ここでいつまでかはわからないが、誰にも見張られることもなく文句も説教もないところで自由に生きていいける。

そう考えれば、こんな人生の終わりと思える場所でも楽しめるだろう。40歳で早々に出世の道は閉じてしまつたんだからかえつて楽になる。

深呼吸をし、新しい職場に対する覚悟を決めていると、鈴谷がス

カートのポケットから出した小さいノートを俺の目の前へ突き出してきた。そのノートには急いで殴り書いた文字があった。

【帰る】

【どこへ？】

俺はノートと鉛筆を受け取って、帰ると書いてきた鈴谷に文字で返事をすると、鈴谷はひどく嫌な顔をしては空を見上げて大きな溜息をつく。

鈴谷との会話は筆談しかできない。でも、これからは手話を覚える必要がある。

すでに彼女のほうは手話、読唇術ある程度習得していると書類には書いてあつた。俺と鈴谷はこれからどれだけ一緒に過ごすかはわからぬ。

あとで連絡して手話と読唇術、耳が聞こえない障害についての本を注文しなければ、と頭の隅つこにいれて忘れないよう気にをつける。そんなことを頭で考えながらポケットから鍵を出して門を開け、片手で二人分のバッグを掴む。もう片方の手は、元気がなくなつた鈴谷の手首をしっかりと掴む。

部下である艦娘が俺のせいで犯罪行為に手を染め、その責任を取つて左遷になつた提督の俺。

深海棲艦に汚染され、治療の薬物のせいで耳が聞こえなくなつた鈴谷。

この辺鄙で自然しかない場所から、俺達二人の輝かない新しい生活が始まる。

青の海から緑の海に。

俺は歩いてきた道へ振り返り、道の奥を見た。二人でここまで来た道。

それは今までの希望にあふれた場所から、希望を見出せない場所に来るまでの考えをまとめるための道かと思つてしまふ。

溜息をついた俺は、鉄の門を押して廃墟のような整備基地へ鈴谷と一緒に入つていく。

そして小さくつぶやく。「さらば、文明社会よ」と。

世界の果てで摩耶さまを迎えた日

開けた窓からは朝日が入りこみ、セミの声がじりじりとうるさいほどに鳴り響く朝の7時。

今日から8月の第3週となり、カレンダーの上ではちよつとずつ秋が近づいていく。

海風が吹くときには涼しいこともあるけれど、まだ夏は終わらない。

今日の朝食は熊野が作った野菜サラダに焼鮭と白いご飯。

朝なら簡単なトーストでいいじゃないか、と言つたが熊野は健康的な食事がいいと俺の言うことを聞かなかつた。

監視所兼住居の1階で、俺と熊野はテーブルの上で向かい合つて食べていた。

どんなときもしつかりとしている熊野は制服をきちんと着て、みだしなみが整つている。

俺はというと楽なジャージを着たかったが、熊野に強く言われて白衣軍服を着ている。ただ、暑いために帽子をはずすことだけは許してもらつた。

そんないつもと変わらぬ朝を過ごしていたが、熊野がお米を食べる手を止めて窓へと顔を向ける。

「車のエンジン音が聞こえますわ」

「来るのは今日の夕方だと思つたけど」

定期的な物資の補給にトラックが来ているが、こんな朝早くから迷惑なことだ。

俺は熊野と同じ方向に耳を向けるが、セミの音しか聞こえない。

そのまま待つているとトラックの音が聞こえ、俺は食事を途中でやめて席を立つ。

すると熊野も席を立つたので、俺は熊野に近づいて体の右側を向ける。

「掴まれ」

「あら、今日は紳士的で素敵ですね」

「俺はいつも紳士じゃないか」

俺の言葉に返事をせず、熊野は『そういうことにしてあげます』と
いうような笑みの表情を浮かべて左手で肘の上を掴んでから右手で
杖を持つ。

熊野の準備ができたのを確認したあと、熊野を連れて少しゆつくり
と歩いて外へと行く。

軍のトラックが来るときはいつも一緒にふたりで迎えをしている。
どつちからやろうと言つたかは覚えていない。
ふたりで行くのがいつのまにか当たり前となっていた。

外へ出ると、雲が少ない空から痛いほどに太陽の光が降り注いでく
る。

じんわりと出てくる汗を感じながら、砂利道の向こうからやつてくる車を待つ。

やつてきたのは乗用車のジープを改造したオリーブ色の小型トラック。車体はフロントの窓枠から黒っぽい布の幌で覆われている。運転席にはいつも来ている迷彩服を着た白髪混じりのおつちゃん
と、いつも誰もいない助手席には制服を着ている摩耶がいた。

こんなところに艦娘がなにしに来たんだ、という疑問を持つている
とトラックがそばで止まり、摩耶が勢いよくドアを開けて笑顔で出で
くる。

「よつ！ 新しい戦い方を考えこいつて言われたから教育担当の重
巡洋艦、摩耶さまがやつてきたぜ！ あ、住むところはテント持つて
きたから安心してくれ。そんなわけで1ヶ月よろしくな！」

元気がいい摩耶は熊野よりも身長が高く、僕よりほんのちょっとだけ背が低い。

首筋まである髪だが、特徴的なツンツンしているカチューシャはつ
けていない。

摩耶が言う新しい戦い方とはいつたいなんだ。

2週間前に、熊野が戦える方法を考えようと聴音機の書類を頼んだ
のは覚えている。

だけど摩耶を呼ぼうとしたことはなく、来るのも今初めて知った。軍に送った手紙は『目が見えない熊野のために新しい戦い方を覚えたい』ということだけを書いた。

それが摩耶をよこしたのは、目が見えなくても戦える艦娘が欲しいという力の入れ具合がわかるようだ。

まあ、突然来てしまったのは仕方がない。なるようになるか。

「こちらこそよろしくお願ひするよ。熊野、俺は荷物を受け取るから摩耶の相手をしてくれ」

「この場所の素晴らしさをとくと語つてあげますわ」

とても楽しそうに言つては俺の肘から手を離し、摩耶の前へと歩いていく。

ここに来てから同年代の子と話す機会がないから、熊野にとつて摩耶との会話はとても楽しいものになるだろう。

おつちやんがトラックの後ろから荷物を取り出しているのを見て、摩耶の相手を熊野に任せて荷物を取りに行く。

車に積まれていたのは缶詰と紙やペンなどの消耗品、それと俺が頼んだ空中聴音機の資料が詰まっている段ボール箱だ。

それらに混じって摩耶の荷物が入っているバッグと、私物らしい大きなテントが入った袋が1つある。けれど艦装は置いてなかつた。

摩耶の荷物は外に置いてくれ、と言われたので入口のすぐそばに置く。

その次はおつちやんとふたりで俺と熊野に必要な物資を2階へと運びこむ。

荷物を運んでいる途中に熊野と摩耶の様子を見ると、ふたりはテープルを挟んでソファラーに向かい合つて座つて話をしていた。

話の内容は摩耶がここに来る途中に来た田舎すぎる光景のこと言い、熊野は俺に言つたとおりにこの場所の過ごしやすさと素晴らしさを語つっていた。

ふたりが楽しく会話をしていることに安心し、熊野の目が見えないことで悪い空気になると思っていた自分が心配しすぎて損をした。

こういう心境は妹がいる兄のようなものだろうか？

妹が日々を幸せに過ごしているかが気になつてしまふが、ないといふ、そんな感情を。

段ボール箱を2階や1階へと必要な場所に運び終わり、汗を流した俺とおつちやんはトラックの影に座りこんで世界情勢について話をする。

海外の艦娘が続々と応援にやってきて戦線も順調に拡大しているという軍が発表した明るい話と、制海権を持つ海域が増えたのに国外からの物資輸入が安定しないという国民の話を。

明るい話をしていると杖をついた熊野が建物から出てきて、その後ろから摩耶がついてきている。

そのふたりを合図とし、俺とおつちやんは会話をやめる。

俺と熊野、摩耶の3人でおつちやんを見送り、トラックは帰つていった。

曲がり角で見えなくなり、摩耶へと振り向くと熊野が俺のすぐそばまで歩いてきてポケットから出したハンカチで俺の汗を拭いてくれる。

熊野に汗を拭いてもらしながら摩耶に声をかける。

「摩耶には聞きたいことがあるが、まずは飯にするか」

「あー、朝飯を邪魔して悪かつたな。うちの提督が早く行つてこいつて言うもんだから」

「朝飯は食べた？」

「いや、これからだ。だからちよいとそこらで料理していいか?」

「……外で？まあ、自由してくれていいけど」

料理というからには携帯食糧ではなく、なにかの道具で料理をすることになる。

材料も道具も持つてきているということは、あまり迷惑をかけたくないと思つたのだろうか。テントを持ってきているぐらいだから。

そのおかげで住むところも俺と熊野のふたりでいっぱいだから、ありがたいけれど。

鼻歌を歌いながら楽しげに荷物から物を取り出す摩耶を見たあと、熊野を連れて部屋へと戻る。

冷めた朝食をすぐに食べ終わり、食器を片づけて片付けを済ます。

そうして時間がてきてから摩耶の様子を見に行くと、熊野は来た荷物をわかるのだけ片付けてくると言つてくれた。

自分から行動し、気がきく熊野の存在はありがたい。

外へ行くと、バッグから荷物が色々と物が散乱している光景があった。

摩耶はその物から少し離れた位置で建物の影になる位置にいた。土の上に座りこんで料理をやつてている。

視線の先にはコンパクトストーブ。

それは小さいカセットコンロのようなもので、燃料もそのコンロに使うガスボンベを使いタイプ。

コンパクトストーブの上にある小さめなフライパンにはオニギリだつたお米を崩して入れてあり、ツナの缶詰めも入つていた。

「お、なんか用でもあつたか？」

「どうしてるかと思つて」

その返事を聞くと摩耶は料理へと戻る。

塩コショウをふりかけ、オニギリに巻いてあつたノリを手でちぎつて入れ、ちよつと炒めたところで完成する。

摩耶は皿をふたつ取り、そのうちのひとつにスプーンと料理を載せて俺へと向けてくる。

「せつかくだから、あたしの味を知つておいてくれ。1ヶ月もいるんだから家事や掃除をやる必要があるだろ？」

「テントに住んでもらうからそこまではしなくていいよ。でもうまそ
うな料理はもらつておく」

「アウトドアは單なる趣味だから気にすんな。ほれ、受け取れ」

若い女の子なのに珍しい趣味ということに関心しつつ、皿を受け取ると摩耶の隣に座る。

両手を合わせて「いただきます」と言うとさっそくその料理を口へと入れる。

その味は美味だった。その一言に尽きる。

オニギリにツナ缶の油がよく染み込み、ツナと塩コショウがいい具

合にからまつて素晴らしい味だ。

普段が熊野の健康的な料理ばかりだから、肉も食べることが少なく、そのため摩耶が作ったワイルドさがある料理はとても新鮮だ。これはすごく体にいいというものではないけれど、油っぽい料理はそんなに多く取る機会がないから嬉しい。

町に行つてジャンクフードを食べると、こつそり誰かが熊野に教えるから怒つて説教をされる。だから食べる機会がない。

でも今日は違う。

今だけは体にちょっと悪い料理が食べれるんだ！

目に涙が浮かぶと、焦った摩耶がすぐ隣にやつてきて俺から料理を取り上げてくる。

「なにか嫌いなものでも入つてたか!? あたしが悪かつた。材料とかは見ればわかると思つてから、えつと……ほら、これを飲め！」

すぐに摩耶から水筒を渡されて、その中身を飲む。

水筒に入つていた麦茶は油っぽい口を爽やかにし、混乱していた意識がはつきりとする。

「……久々にこんな油がある料理が食べられて嬉しかつたんだ」

水筒を返すと摩耶が呆れた表情をしたが、すぐに口を大きく開けて笑いながら背中をバシバシと強く叩いてくる。

「あら、にぎやかですわね」

その声に振り向くと、杖をついた熊野が俺たちの方に向かつてゆつくり歩いてくる。

すぐに上着を脱いで摩耶の隣に敷いてから立ちあがり、熊野のそばへ行くと俺の肘を掴んでもらつて摩耶の隣へと誘導していく。

そして俺の上着の上へと座らせて、その隣に俺が座る。

「摩耶が料理してたんだけど、これがうまくてな。米を炒めた料理なんだ。ほら、熊野。あーんして、あーん

「あー……んっ」

摩耶から皿を返してもらい、可愛らしく開いた口に摩耶の料理を入れていく。

「うまいだろ?」

何も言わず、ゆっくりと味わった熊野はおいしいともまずいとも取れない微妙な表情を向けてくる。

「摩耶さんには悪いんですけど、少々不健康な味がいたしますわね」

「たまにはいいだろ。ほら、口開けて」

熊野が気にいってない味だが、この味を覚えてもらつていつの日か似たような料理を作つてもらいたくて熊野の口へとまた入れていく。

親鳥が雛鳥にエサをあげるような気分が楽しいと思つていると、ふと摩耶から視線を感じて振り向く。

俺と目が合うと恥ずかしそうにして目をそらす。

「お前ら、いつもそんな恥ずかしいことやつてんのか?」

「仲が良ければ普通だろ」

「何もおかしくはありませんわ。提督、あーんしてください」

俺から皿を取つた熊野は楽しそうに俺にスプーンを向けてくるので、熊野の手をそつと掴んで自分の口元に誘導して食べさせてもらう。

そんなふうにしていると摩耶は俺と熊野の背を向けて「提督と部下がこんな関係つて……。仲が良すぎると軍人としての指揮系統がダメにならないのかよ」とそんなことをつぶやいていた。

料理を全部食べ終え、建物に背を預けて俺達3人は夏の空を見上げて静かな時間を過ごす。

腹がいっぱいになると動く気分がなくなり、セミの声を聞き続けた。

それが何分か続いたあとに、時に熊野が力強くはつきりと声を出します。

「先ほど摩耶さんがおっしゃつたことですが、こんな関係だからこそできるものがあります。

はじめは目が見えなくても戦わせられることに落ち込みましたが、今の提督と出会つてから変わりました。そしてこの場所です。ここの人たちは優しくしてくれました。

だからわたくしは信頼してくれる、信頼している人のために戦うのです。

戦う理由は、提督とこの場所を守るためだからです」

「なあ熊野、艦娘つてーのは人類を守るために戦うつて教わらなかつたか？」

「確かにそう教わりました。ですが、わたくしの短い人生でもわかつたことがあります。そういう希薄な意識で戦う艦娘は総じて早く死にます。個人的な理由の子たちは長く生きています」

それを聞き、摩耶は深くため息をつき、自分の髪をぐしゃぐしゃとかき回し、またため息をつく。

「そういうことを言つてると左遷じやなく、もつとひどい目になるぞ。お前もお前の提督も」

「それなら何も問題ありませんわ。なぜならわたくしと提督は一蓮托生ですもの。苦しいときも一緒です」

「あー……お前ら恋人、いや結婚してんのか」

「してないが

「してませんわ」

俺と熊野が同時に言つた言葉に摩耶はきよとんとし、頭をぼりぼりと搔く。

深く大きな息をつき、摩耶は立ちあがると使つていた道具を片付けはじめめる。

「提督と艦娘がそんなに仲いいのは珍しすぎだつての。あたしが間違つているような気がしてくるぜ」

その言葉を聞いてから熊野の顔を見ると、おだやかな表情があり、それを見て思つたことを摩耶へと言う。
「わがままな妹のようなものだな」

「手のかかる兄ですわね」

俺の言葉を聞いてから言つた熊野はクスクスと小さく笑う。

「まあ、今では妹の熊野のために提督をやつているつてだけだからな、俺は」

「……あたしだけ世界平和のために頑張つてることが正しいのか疑問に思つてきたよ」

摩耶は片付けが終わると、次に散乱していた物を片付けはじめる。

「俺も以前は世界平和のために頑張っていたが疲れたんだ。今では大事な熊野のために仕事をしている感じだな」

「あら、提督は口がお上手ですね」

「お前らはのんびりしてんなあ。……さて、もうちょっとしたら目が見えない熊野のために会議と練習を始めるからな！」

すべてが片付け終わり、摩耶はテントを作ろうとしたため手伝おうと立ちあがる。

「いえ、その前に少しあたくしの用事につき合ってください」

立ちあがる熊野に近づこうとすると、俺へ手の平を向けて来るなど伝えてくる。

杖を使い、さつきまで摩耶の声がしていた場所へと熊野が歩いていく。

摩耶の正面で立つと

「な、なんだよ」

「少し顔を触らせていただきたいのです。これから同じ時間を一緒に過ごすわけですから」

「あー、そつか。顔がわかつてないと落ち着かないもんな」

納得と言った声を出す摩耶だが、その予想していることは違う。

熊野にとつて、相手の顔を知りたいというのは『信頼したい』ということだ。

相手が触らせてくれるなら『良い人』、ダメなら……どうだつたか聞いたことはない。

熊野が摩耶へと手を伸ばすと摩耶はじっと黙つたままで、されるがままとなる。それから少しのあいだ、摩耶の顔を触つて理解したのか手をそつと離していく。

摩耶から一步離れると、熊野は自分の頬や顎に手をあてて考え込む。

「わたくしのほうが美人ですわね」

「……あん？」

「顔の形はわたくしのほうが――」

「いやいやいや、肌や肌の色ならあたしのほうが綺麗だから形だけで美人とかって」

「色は化粧で誤魔化せましてよ。提督もわたくしのほうが美人と思いますわよね？」

「や、化粧の色を乗せるのに元の肌質は大事じゃないか、形だけが美人じゃないよなあ？」

熊野の肯定を求める声と、摩耶の助けを求める視線を受けるが、俺は無言で目をそらす。

今まで熊野とふたりきりで静かな日を過ごしてきたが、今日から1ヶ月はとても賑やかになりそうだ。

熊野も生き生きと摩耶と会話しているし、からかうことができる関係が気についたらしい。

ふたりの言い合いを聞きながら俺は摩耶のテントを作り始める。楽しく過ごし、お互いに自分のためになる生活を過ごしていくけたらいいとそう思った。

世界の果てで熊野と暮らした1か月と4週間

天気がいい朝の午前8時。

夏の象徴ともいえる大きな入道雲が青空に浮かび、真夏の太陽が降り注いで海からは波音と海風のひんやりとした風がやつてくる。

俺は軍の制服をしつかりと着ていても風のおかげで涼しく、人がいない砂浜の波打ち際から少し離れたところを熊野とふたりでゆっくりと歩いていた。

熊野は右手で杖を持ち、左手でまっすぐに伸ばした俺の肘をそつと優しく握っている。

俺は熊野に握られている腕をしつかりと体にくつつけ、揺れないようについていた。

砂浜をふたりで歩くのはよくあることだけれど、今日はいつもと違つて気分が良くない。

理由は熊野の艦装についてだ。

ここ2週間ほど、摩耶を入れた3人で熊野用の艦装案について考えていた。

そのために目が見えない今の状態でどれほどの能力があるのか、砲撃や魚雷などの攻撃と回避行動の試験をした。

多くの艦娘の教育を担当していた摩耶によつて確認をしたが、どれも成績は今ひとつ。

熊野は普通の艦娘のように、海の上で自由な戦闘はできないと言わされた。

これが不満だつた。

俺は熊野が目が見えていたときのようすに水上を自由に駆け回る姿を期待していたが、もうそれはできないようだ。

たとえ艦装に空中聴音機をつけて音を聞こえやすくしても、目で見ると同じようには無理と判断された。音だけでは相手の動きを予測しづらいし、すぐには行動に移せない。

結果を見て、摩耶は空中聴音機と水上機だけを使う艦装改修案を出した。航空巡洋艦と違い、砲さえも持たない。

俺は他に有効な案を思いつくこともなく、それが最善と思うものの改修案に納得ができない。

熊野が海の上で自由にならないことは心の隅でわかつていたことはいえ、落ち込んでしまう。

このことを部屋の中ですっと考え続け、ため息がたくさん出ていたらしく心配してくれた熊野に散歩へと誘われた。

でも砂浜に来ても変わらない。

どこまでも続く水平線を見てもその向こうを想像してワクワクすることもなく、砂浜に打ち寄せる心落ち着く波音や優雅に空を飛ぶウミネコの声でも気持ちが安らぐこともない。

「こんな美少女が隣にいるのに考え方ですか？」

「そうだね、熊野みたいな素敵な子を放つておいたら人生の1割は損するね」

「あら、1割だけですか？」

熊野の穏やかな声を聞き、不満しか感じていなかつた心が少しやらぐ。

この穏やかな熊野の声を聞いて、今度は別の悩みがやつてくる。

それは熊野が戦闘に出るということ。

艦娘なら戦うことはとても当たり前のこと。けれど、怖いことが意識の表面へ浮かんで離れない。

それは熊野が沈んてしまうことだ。

遠くの海で部下である艦娘、いや仲の良い友達がいなくなってしまふのは嫌だ。

死に際を見るのもなく、遺骨さえもこない。苦しみも悲しみもわかるところなく、俺は陸の上で待つことしかできない。

俺はここに1人残つて後悔をするだけの生活をするだけに違いない。

「提督、悪いことばかり考えすぎますと本当になってしまいますわよ？」

「大事なお前のことを考えすぎて何が悪い」

いらっしゃった声を出してしまう、すぐに後悔をする。熊野は俺を心配

してくれただけだというのに。

穏やかな顔が怯えたり嫌になつていると考えると怖く、すぐ隣にいる熊野の顔を見ることができない。

「雨にも負けず、風にも負けず。雪にも夏の暑さにも負けず。丈夫な体を持ち、欲はなく決して怒らずいつも静かに笑つていてる」

唐突に熊野が静かに喋りだした。

俺に向かつて言うわけでもなく、ただ言葉を続いている。

それは言葉で宮沢賢治の『雨ニモ負ケズ』という詩。

熊野が何かを伝えたいのかと考え、静かに聞く。

「東に病気の子供あれば行つて看病してやり、西に疲れた母あれば行つてその稻の束を負い」

言葉ははじまりから最後まで続く。

「褒められもせず苦にもされず、そういうものにわたしはなりたい」

最後にあるこの言葉を持つて『雨ニモ負ケズ』は終わる。

俺はゆっくりと立ち止まって熊野へ顔を向けると彼女は俺の顔を見上げて晴れやかな表情をしていた。

「宮沢賢治の言葉は、誰かのために行動するという人間の理想像のひとつとわたくしは思うのです」

そう言われるも、俺はそんな立派なことはできる気がしない。

誰かのため、熊野のことを心配していたがそれは自分のため。失うのが怖いだけだ。

理想というだけで、自分よりも相手を優先して考えるなんていったいどういう人間がするのか疑問に思う。

「わたくしが戦うことを心配してくれる提督は、前線に戻つてもきっと良い働きができます。艦娘を気遣える提督はとても信頼できるものでしてよ?」

「そう言わると嬉しいものだね」

「過去を反省し、前へ進もうというあなたをいじめる人がいたら、遠慮なくわたくしが叱りつけてあげますわ」

過去の記憶が俺を責めてこようとしていたが、熊野のおかげで心が軽くなる。

嬉しい言葉を聞き、笑顔を浮かべていく熊野の頭を空いている手で優しく撫でる。

それからまた歩き出し、砂浜やそこから見える状況に何も問題がないことを確認した。

熊野のおかげで心が落ち着き、摩耶提案の艦装改修案を素直に認めることにして、今の仕事場である監視所へと戻ることにする。



監視所に戻つてみると、セミの声があたりに鳴り響くなかで見えてきた光景は賑やかなものだつた。

赤ジヤージを着た摩耶が白ワンピースを着た黒髪ワンコに肩車をし、周囲を楽しげにぐるぐると歩いている。

ワンコが手に持つているのは虫とり網に、肩に下げているのは虫力ゴだ。中にはカブトムシが2匹か入つていた。

高校生な外見の摩耶と小学生なワンコの組み合わせは、仲のいい姉妹を思わせてくれる。

そんなふたりはあちこちにある木に近寄り、摩耶は頭の上から指示してくるワンコと仲良くカブトムシを探しているようだ。

摩耶とワンコは初対面なはずだけど、すぐに仲良くなるのは両方の素直さのおかげだろうか。

考えてもいなかつた光景を見ていると、熊野が肘を引っ張つてきて今の状況を説明してくれという顔で見上げてくる。

「摩耶がワンコを肩車してカブトムシを捕まえようとしている。どちらもはしゃいでいるな」

「麻衣ちゃんが楽しそうな声ですね」

熊野はふたりの声を微笑ましげに聞き、俺も同じようにはしゃいでいるふたりの声を聞く。

少し距離があるからか、または夢中になつてているのか俺たちに気付く様子はなく、しっかりと観察することができる。

ふと熊野の表情を見ると何か物欲しげになつていて、顔が向いている方向はふたりへと向けたままだ。

肩車というものを、摩耶とワンコの楽しそうな声を聞いてうらやま

しがつていると予想した。それと俺に遠慮していることも。

たとえ目は見えなくても高い位置にある感覚はわかるし、風や音の感じ方も変わるから楽しめんと思う。

「肩車されてみたい？」

「その、ああいうのはやはり見えなければ楽しめないとありますか、ええと……」

「見えなくとも楽しいか、せつかくだからやってみようか」「……それではお願ひしますわ」

恥ずかしそうに言う熊野は俺から手を離す。

それから俺は熊野の杖を受け取つてから後ろに回り込む。

「足をちょっと広げてくれ。そう、それでいい。行くぞ、熊野」

「よろしくてよ？」

「足、触るぞ」

俺はしやがみこみ、広がつた熊野の足の間に頭をとおし、すべすべした肌触りがする太ももをしつかりと掴んで慎重に立ちあがる。熊野は怖々と俺の頭を両手で掴み、俺の首を挟む太ももに力を入れてくれた。

それで体勢は安定し、きちんとした肩車ができた。

そのまま熊野に慣れてもらおうと立つたままでいると、俺たちに気付いた摩耶があきれた顔をしてやつてくる。

摩耶の上に乗っているワンコは熊野を見つけると、まぶしいほどの笑顔でこっちにぶんぶんと手を振つてきた。

「なにしてんだ、あんたら」

「わー！ 熊野お姉ちゃん、わたしと一緒にだね！」

「え、ええ。ですけど、肩車は結構恥ずかしいものですわね」

あきれた声の摩耶とかなり嬉しそうなワンコの声。

恥ずかしがる熊野の顔はきっと可愛いはずだけど、肩車をしていると見えないのが残念でならない。

でも怖がつたり嫌がつたりしてないから、それなりには楽しめてもあると思う。

「ふたりはいつ知り合つたんだ？」

「んー？ さつきだな。このちつこいのが来たから、代わりに相手してやつたつてわけだ。我ながら偉いな！」

摩耶がワンコを樂しませるために俺の周りをぐるりと一周しているときに、熊野と砂浜で決めたことを言わなきやいけないことに気付いく。

今言わないと、後になるほど俺の決心が揺らいでしまうから。

「摩耶」

「なんだ、今度はあたしを肩車しようつてか？」

「摩耶がいいならしてもいいけど。話変わるけど、艦装のあれは摩耶が言つたのにしようと思う」

「おう、わかつた。あとで書類持つていくからな」

と、眞面目な話をすぐに終えると頭上から熊野の声が降つてくる。「提督、そろそろ降ろして欲しいのですけど」

わかつたと返事をしてから腰をかがめ、割れものを扱うかのように丁寧に熊野を地面へと降ろす。

体重がそれほど重くない熊野とはいえ、人ひとりを持ち上げたから腰や肩が少しばかり痛む。

「楽しかったか？」

熊野に杖を返すと熊野は俺の横へとやつてきて、さつきと同じように肘を掴んでくる。

そこが定位位置とでもいうかのような安心した息をついた。

「提督の肩の上はいつもより風をよく感じ、音は綺麗に聞こえました。肩車ということでも世界は変わる、ということが実感できましたわ。……それと、わたくしは重くなかったですか？」

「熊野の重みならいつでも感じていたいほどさ」

俺を心配してくれる熊野に冗談めかしてそう答える。

「えつちな意味でか、それは」

熊野と話をしているあいだに素早くワンコを降ろした摩耶は、熊野とは反対側の隣へとやつて来てニヤニヤとした表情で俺の頬を人差し指でつついてくる。

人差し指を払い、またつつかれるといったじやれあいをしていると

ワンコが熊野の前にやつてきた。

熊野はおだやかな顔をワンコに向け、ワンコはしつぽや耳があつてピコピコと激しく揺れ動いているような錯覚をしてしまう。

「熊野おねーちゃん、一緒に遊びぼー！」

「なにをして遊びま——」

「カブトムシ！」

熊野に会えてテンションが高いワンコは、引きつった熊野の笑顔を気にすることなくキラキラとした輝いた笑みを向ける。

虫がそれほど好きでない熊野は数秒間固まり、助けを求めるかのような顔を俺に向けてくるが、俺の表情がわかるはずはないのについ顔をそむけてしまう。

それは摩耶も同様で、今の熊野を救うことは誰もできない。

俺達の気配を察した熊野は俺の肘から力なく手を離し、先に監視所の中へと走つていったワンコのあとを歩いて追つていった。

その後ろ姿の気配は恨みがついぶんとこもつているようにも感じたが、滅多に見ることのない姿は新鮮でたまにはこういうのもいいと思う。

「助けなくてよかつたのかよ」

「その気持ちがあつたけど、熊野の成長やワンコの期待を裏切れないからね」

「いじわるな奴だな、おい」
熊野の困る姿を見て爽やかな笑みを浮かべる俺に、摩耶はにんまりして肘で脇腹をつついてくる。

あとで熊野から『わたくしに対する優しさが足りませんわ！』とすつごく怒られるだろうけど、いつも穏やかな熊野にたまにはこういいういじわるもしたくなる。

仕返しが来るだろうけど、なにをしてくれるか楽しみにしている俺はまったくおかしくはない。

「なあ、あのちっこい子、名前はなんていうんだ？」
「知らないで遊んでたいのはさすが摩耶というべきか……。あの子は麻衣つて名前で、俺は外見や性格からワンコつて呼んでる」

「あー、ワンコか。うん、熊野にひつついてるのを見れば納得だな」

何度もうなずいて納得をする摩耶。

ワンコの名前を知らなかつたのに、仲良く遊べるのはすごいと思う。

俺なら名前がわからない人と一緒の行動をするなんて怖くてできない。あとでどういう厄介事に巻き込まれるかが怖くてたまらないから。

摩耶に感心する目を向けると恥ずかしそうに顔をそらしたかと思うと、俺へと背中を向ける。

「世界平和のために戦つてるあたしが、子供にさえ優しくできないとダメじやんか。そういうことができないと世界のために戦うなんてのはおかしいとあたしは信じてるからな」

立派な心がけだから別に恥ずかしがる必要はないし、俺は素直に感心しているというのに摩耶は背中を見せたままだ。

ここで俺のいたずら心が芽生え、気持ちを抑えつつ摩耶の後ろに近づいていく。

「肩車するぞ」

「え、おい！」

強引に足のあいだに頭を突っ込み、一気に摩耶の体を持ち上げる。熊野より筋肉があつてハリがある足をしっかりと掴み、俺の頭をぽかぽかと強めで叩いてくる摩耶に耐えてしつかりと立つ。

「さつき肩車がどうの言つていたじやないか」

「確かにそう言つたけどな、あたしの気持ちを考えてみないか？」

「摩耶も楽しませてあげようという親切心じやないか。ほら、しつかり捕まつてないと落ちるぞ」

「や、待て。あたしはされるよりするほうが——うおおお!?」

摩耶がしつかりと手足で捕まってきたのを確認すると、あたりをぐるりと早足で歩き出す。

頭の上から響き渡る摩耶の悲鳴が段々と楽しげな声に変わつていき、その様子に安心する。

摩耶への行動はいたずら心。

けれど誰かのために行動すること、それは自分よりも他の人のことを多く考えるということだ。

自分よりも相手を優先することは、相手が喜ぶ姿を見れたならそれは幸せかもしれない。

最も俺がしている今の場合は、摩耶に楽しんでもらいたい気持ちがあるが俺自身も楽しみたいだけなんだけれど。

世界の果てで熊野と遇^バした2カ月

8月があつというまに終わり、まだ暑さが続く9月がはじまった。昼間から気温がほとんど変わらない今は、夕日がまぶしい夕方の午後5時。

監視所の1階に入つてくる夕日の光は肌をちりちりと焼くかのように暑い。

外から聞こえてくるセミの鳴き声のおかげで暑さが加算された気もし、やる気が低いのが常態化しているこの頃。

窓を全開にして入つてくる空氣は弱くて生ぬるく、肌に汗が湧き出てくるのを止めることができない。

着ている服は下はいつもの制服だが、上は黒のTシャツを一枚に汗拭き用のタオルを首に巻いているだけ。

暑さに耐えつつ机に向かつてやつているのは熊野に関する書類。

熊野専用艦装に関連するもの、視覚障害の戦闘運用についての意見、視覚障害者である艦娘と暮らしての日々の感想などが書くことが多くて苦労している。

4日前に摩耶から渡されたたくさんの書類を書きづけ、あともうちよつとで終わりそうだ。俺の手伝いができるからと、ひとりで町へと遊びにいった摩耶には多少の恨みがある。

ひとり黙々と書類を続けるのは前にいた鎮守府以来で懐かしさを感じる。嫌なことがあってここにきたが、あの頃の楽しかった日々もまだ覚えている。

はじめはこんな田舎でどうなるかと思ったが、熊野がいたおかげで自暴自棄にもならずに住んでいる。

開いた窓から制服姿の熊野が畠に水やりをしている姿が見える。

熊野を目にするだけで心が落ち着くのは楽しそうに水やりをしていのもあるけれど、今まで会話をってきて信頼できることがわかつているからだと思う。

文字ばかり眺めていた心が癒えたところで視線を書類へと戻し、熊野と暮らしての感想をいかに素晴らしい女性かということを書き始

める。

小説のような文章を軍にあげる書類として熱心に書いていると、水やりを終えた熊野が杖を使つて戻ってきた。

仕事をしている俺に向かつて歩いてくる熊野の顔からは、額から頸へと汗が流れ、ポタポタと床に落ちていく。

俺はすぐに立ちあがり、暑さで疲れている熊野の汗を拭おうと自分の首に巻いてあるタオルに手をかけた。

だが、すぐにそれは汚すぎると気付くことができ、暑さで鈍つていい自分の思考に腹が立つ。

なにか拭くものはないかとあたりを見回し、綺麗な布はないため大急ぎで2階へ行つて綺麗なタオルを取つてくる。

まだ机の前に立つてある熊野の後ろに来て、荒い息を少し整える。

「熊野、汗を拭くからこっち向いてくれ」

振り向いてくれた熊野は不思議そうな顔になつていた。

「渡していただければ自分でできますけど」

「俺がやりたい気分なんだ」

「ではお願ひしますわ」

俺は熊野の顔にそつとタオルを当て、優しく顔全体をタオルで拭いていく。

汗から花のような匂いがする気がして、鼻を顔へと近づける。

「あの、くすぐつたいのですけど」

「悪い。熊野からいい匂いがしたのだから」

「汗臭いわたくしを喜ばせようとしたくていいですわ」

本当なんだけれどなあ、と言つても信じてもらえないでのこの言葉は心の中にしまつておく。

顔の汗を丁寧に拭き終わり、次に首筋と両手を拭いて終わる。

そうして全部が終わり、1歩下がると熊野が服をまくりあげた。服の下には汗ばんでいるけれど綺麗な白い肌のお腹と、おしゃれな白いブラが見えてしまったので急いで熊野の手を掴み、下へと降ろす。

「そこは自分でやつて……そうだ、シャワーを浴びたほうがいい」

「提督がお仕事を続けているのに、ひとりだけ休むのは気分が悪くなります」

突然に服を下げられたことに驚きもせず、からかわれたのだと気付くが俺のことを気遣ってくれるのは嬉しくなる。

熊野の手にタオルを握らせ、俺は机へと戻る。

「2階で汗を拭いてきますわ。こつそりとなら覗いてもいいですわよ？」

「お色気たっぷりな体に成長したら覗かせもうよ」

熊野は「残念」とつまらなそうに言つて階段をあがつて、2階へといつた。

自分ひとりだけになり、慌ただしかつた時間に深く息をついて緊張した気分を落ち着ける。

距離が近いのはいいけれど、近すぎると熊野はもはや性別を気にしなくなるのかと悩む。

熊野に手を出す気はまったくないが、あれだけ無防備な姿を普段からしていると俺以外の男がいたときに危ない目にあつてしまふかもしれない。

どうやつて納得してもらえるかをあとで考えることにし、今は熊野小説となり始めた書類を書き続ける。

——それから熱心に書き続け、夕日が落ちてなくなり月が昇ろうとするころに熊野は戻ってきた。

先ほどとは違つて予備の制服を着ていて、汗ばんでいる肌はなくなつていた。

「提督、コーヒーは飲みますか？」

それを聞いて考える。

熊野が作るコーヒーは手間がかかり、ドリップ式やサイフォンなどの様々な道具を試すことが多い。それらは熊野にとつて難しく、時間もかかる。それにおいしくできることはそんなに多くない。

悩んでいる俺の態度がわかつたのか、拗ねた様子で棚から瓶に入ったインスタントコーヒーを取り出して見せてくる。

「ホットでお願いするよ」

コーヒーの作り方にこだわりがある熊野は、俺が愛用しているインスタントはそれほど好みじゃない。それでもインスタントを使つてくれるのは俺が忙しく、疲れていることを理解してくれるからだと思う。

インスタントコーヒーは手軽にでき、安い早いうまいと三拍子だ。ホットならコールドと違つて冷やす手間もなくなるし、より簡単安全になる。

熊野が作つたコーヒーができあがり、手渡しされたマグカップを手に取つて口の中になんかだけ入れる。

そのコーヒーの味は苦かつた。

目で判断できず、お湯の入れる量はカップに手をあてて温度の変化によつて把握している熊野だ。

だから熊野のコーヒーは毎回味が違う。

苦かつたり薄かつたり、時にはちよどいこともある。

うまいコーヒーを飲みたいだけなら自分でやればいいだけだが、熊野にやつてもらうということが大事だ。淹れてもらうことを俺は楽しんでいる。

熊野から楽しげに『コーヒーを飲みますか？』と聞かれて断つたら、きつと寂しそうな表情になつてしまつて俺は物凄く後悔するに違いない。

その1回の選択で熊野とここで暮らすのんびりとした幸せな時間は崩れてしまいそうな幻想を感じてしまう。

少量のコーヒーで様々な考え方で頭が満たされ、熊野が淹れてくれた想いを感じながらコーヒーを飲んでいく。

苦い味のコーヒーはだらけた意識を刺激してくれる。

「それでお仕事のほうは終わりましたか？」

「もう一度書類全部を確認して終わりだよ」

「お疲れさまでした」

腰を深く曲げ、お礼をする姿に動搖するが顔をあげた熊野は俺の動揺を気にすることなく台所へと戻つていった。

初めてあそこまでされ、驚くのも無理はないと自分の乱れた心を落

ち着かせていく。

俺がやっている書類はすべて熊野ひとりのためのものだ。だからああやつて、礼をしてくれたんだろう。

そうでないと、熊野がここからいなくなるんじやないかという考えが出てきてしまう。

いずれかは俺と熊野が離れるときが来るだろうけど、まだそれほどすぐではないはず。

障害を持ち、戦えなくなつた艦娘たちを再戦力化しようとしている軍の動きはまだ鈍い。

軍やメディアの伝える情報を信じるならば、戦線は安定している。だから、これからもきっと大丈夫だ。

自分でも根拠に乏しいことを信じたくなるほど、俺はこの場所での熊野との生活を楽しんでいる。

「摩耶さんにもコーヒーホルダーを用意しますわ」

暗くなつた室内に照明のスイッチを入れ、マグカップに入つたコーヒーを持つて熊野は外へと出していく。

摩耶は昼飯を一緒に食べてからは会つてなく、テントのなかでなにかをやつていてるようだ。

自分は熊野に頼りすぎなんじやないか、と弱気になるがそんなことを考えるよりも今は書類を片付けるべきだ。

終わつた書類をじつくりと一枚一枚確認し始めると、部屋に熊野とジャージ姿の摩耶が入つてくる。

摩耶は湯気の立つているマグカップを持ちながら、俺の机の前へとやつてきて確認している書類を覗き込んでくる。

「提督がやつている書類は確認だけで終わるつて熊野から聞いたんだけど？」

「ああ、眞面目に軍人している気分になつたよ」

「そつか。じゃあ、あたしは荷物まとめてくるか！」

その言葉が理解できず、意味を聞こうとして書類から顔を上げると摩耶は熱いコーヒーを一気に飲み干してマグカップを机の上に置く。そうしてから早足で外へと出て行つた。

「……熊野、あれはどう解釈すればいい?」

摩耶が置いたカツプを手に持つて片付けようとした熊野に聞くが、熊野は首を横に振る。

「書類が終わるなら、出番はもうすぐだつて言つていましたけど自分なりに言葉を理解するなら、單にできた書類を自分の手で持つていき、報告も上司にするということだろうか。

だからといって、今から準備して出ていくのは相当に慌ただしい。「よくわからないが、腹が減ったな。熊野、夕食を作つてくれるかい?」

「はい、いますぐに」

今の幸せがちよつとずつ崩れていく気配がしながらも、熊野の笑顔に俺は心から安心した。



日が落ち、夜になつた頃には3人ぶんの料理ができあがり、俺の仕事もすべて終わつた。

手が空いたのでテーブルに食器を並べたり料理を運んでいると、きちんと制服を着て背中にリュックサックを背負つた摩耶がやつてくる。

「書類をもらひに来たぞ」

「今から帰るのか?」

すっかり出かける準備が出来ている摩耶に聞くと、摩耶の顔はどことなくにやけている。向こうにいる自分の提督がよっぽど嬉しいみたいだ。

「できあがつたらすぐに戻つて来いつて、うちの提督に言われてたからな。今は大変な時期だからつて」

俺がさつきまで使つていた机に置いてある書類を手に持ち、一通り確認するとリユックサックへと入れていく。

テーブルに置いてある料理、焼いたサンマを箸で素早く解体して骨を外すと、手でひよいつと持ち上げて1尾まるごとを口に入れいく。

それをもぐもぐと口の中で噛みながら、監視所兼住居であるこの建

物をじっくりと見てまわっている。

「摩耶さんはどうかしたのですか？」

「俺の書類が終わつたから、帰るみたいだ。今すぐに」

「わたくしの艦装改修案だけでそんな忙しそうにするなんて。……戦争の足音が聞こえてきそうですね」

こんな辺鄙なところの場所でも、軍人として関わつてゐるからずつと平和に過ごすなんことはできない。

予想より早いとか遅いなんて感情はなく、ただ受け止めるだけだ。戦力として前線から外された熊野が、必要となる状況になりつつある。

俺が空中聴音機に関する書類を頼んだときに、摩耶も一緒にやつてきた時点で戦うことがある可能性は高まつていた。

そして、今。

書類が完成したら戻つてこい、と前もつて指示されていたことは急いでいることがわかる。

そんなに急ぐのは大規模攻勢をするか、または劣勢な状況のどちらかだ。

俺のところへ戻つてきた摩耶は、口の中のサンマを食べ終えていて、自分の手を服で拭いてから俺に手を差し出してくる。

「世話になつたな」

「来るときもいなくなるときも急だな」

手を差し出すと、思つていた以上に強い力で手を握つてきて摩耶の目からは寂しさを感じる。

続いて熊野にも同じように握手をし、何も言わずに外へ出していく。俺は熊野を連れ、一緒に摩耶を見送る。

暗くなつた外は中からの明かりでテントが片付けられているのがわかり、テントと他の荷物はブルーシートをかぶせて固定されおり、建物の壁に寄せられていた。

「すぐに戻つてくるから、荷物はそのままにしておいてくれよ。それじゃな！」

摩耶は明るい言葉でそう言い、電灯片手に暗闇の中を歩いて去つて

いく。

その後ろ姿に向けて、熊野は悲しげに手を振つてゐる。

摩耶といた時間は短いものだつたが、2度と会えないわけではな
い。

楽しく穏やかな日がずっと續けばいいと思う。

でも変わらなければいけない時が、少しずつ音も出さずに俺たちに
近寄つてくるのを感じた。

世界の果てから熊野がいなくなつた日

摩耶がいなくなつて1週間と2日が経つた。

賑やかな人がいなくなると、以前と同じように俺と熊野はふたりで静かに雨の日を過ごしている。

昼前にぱらぱらと降り始めた雨は、午後2時である今では半分ほど開けた窓から雨音が歌声のように建物の屋根や地面をリズムよく叩きつけている。

雨のおかげで気温は下がり、湿度があがつて少し空気がべたつく感じがするも制服を着ていても過ごしやすくなっている。

俺と熊野は特にやることもなく、外に出ることも書類を書くのも筋トレをする用事もなくて暇な日だ。

こういう日には掃除や片付けをする気もなく、ソファーアーに座つている熊野に膝枕をしてもらいつつ頭を撫でてもらう無為な時間を過ごしているだけ。

制服を着ている熊野だけど、スカートで隠し切れない太ももが柔らかく暖かい。その上で膝枕をしてもらつていると幸せな気分が心を満たしてくれる。

意識が睡魔に負けて目を閉じてしまいそうに。

そんなときに熊野が撫てる手を止め、顔を窓へと向けた。
「……どうした？」

「車のエンジン音が聞こえます。軍のトラックがここに来るようですわ」

熊野の手を優しく除け、体を起こして外へと耳を傾ける。

雨音に混じり、エンジン音と水たまりを跳ねる音が段々と近づいてくるのが聞こえてくる。

今日はいつもの補給に来るトラックの予定はなく、摩耶が帰つてきたかもしれない。

嬉しくなる気持ちと共に俺が立ちあがると熊野も杖を持つて立ちはがり、一緒に外へ行く。

軒下から道路の奥を見ると、車のヘッドライトが先に見えて次に才

リーブ色の小型トラックが見えてくる。

その車は俺たちのすぐ前へとゆっくり減速しながらやつてきて止まつた。

「しばらくぶりだな、ふたりとも！　だから抱きついてもいいか、熊野

？」

「ええと、優しくしてください——」

「うりや！」

摩耶は熊野の返事も聞かず、両手を熊野の背中に回して抱きしめた。

熊野と摩耶の嬉しそうな俺はそれを見て、またうるさい日々がやつてきたと実感した。

車から扉が開く音がし、目を向けるといつも来ているおっちゃんが小型トラックの後ろからリュックサックを持ってきた。

手を上げ、軽い挨拶をすると向こうも同じように手をあげて返事をしてくれる。

摩耶は10秒ぐらい熊野に抱きついたあと、おっちゃんからリュックサックを受け取ると俺たちより先に部屋へ入つていった。

かなり元気がいい摩耶に苦笑し、おっちゃんと会話しようとしたが、ブルーシートがかけられた摩耶の荷物を車へと積み込んでいる。なんで積むのか、ということを聞こうと口を開くと、中から摩耶の呼ぶ声がしたので俺は摩耶に事情を聞くことにして熊野を連れて中へと入つていった。

中に入つた摩耶はソファーに座ると、テーブルの上にリュックサックを置いて次々にお菓子と缶コーヒー3本を出してくる。

リュックサックの半分ほどお菓子が出てきたことに呆れながらソファーに座ると、すぐ隣を熊野が俺に体をくつつけるようにして座つてくる。

「来る途中にそちらの店で買つたやつだ。適当に食つてくれ」

「名産品じゃなく、そちらで買つたものか」

気遣いはできるけど見栄を気にしない摩耶らしいお土産に、摩耶ら

しさを感じて1週間やそこらで摩耶が変わつてないことに安心する。

無糖とラベルに書かれた冷たい缶コーヒーをひとつ手に取つてペルタブを開け、熊野の手を取つて握らせる。

「ブラックな缶コーヒーだ。たまにはこういうものもいいもんだぞ？」

「そうですね。味わつて飲むことにしますわ」

熊野が缶コーヒーを飲み始めるのを見たあと、俺も缶コーヒーをひとつ手に取つて飲み始める。

久々に飲んだ缶コーヒーの味は懐かしく、そことこおいしく感じる。

飲んでいると摩耶が俺たちふたりを見て、微笑ましげに見てきた。

「おまえら、ほんと仲がいいな」

「提督はわたくしがいないと何もできないので、いつでもそばにいなといとおせんの」

「ひとりで生活はできるつて」

「良質の睡眠、健康的な食生活、部屋の掃除に洗濯。どれも毎日ちゃんとできますか？」

男の独り暮らしと言えば、夜中まで起きてジャンクフードを食べたり、掃除や洗濯は週に1回が当たり前だ。

そんな生活を考えていた俺は、熊野のなんでもおみとおしという勝ち誇った笑顔に何も言うことができず、缶コーヒーを静かに飲む。

「さて、落ち着いたところで今回の用事だ」

テーブルにあるお菓子の山をどけ、そこにリュックサックから文字と点字の書類がそれぞれ出される。

摩耶は枚数を確認したあと、俺に両方の書類を手渡していく。それらを渡され、すぐに熊野に点字の紙を渡す。

「熊野、点字の書類が来たぞ。雑つぽい摩耶が細かいところまで気が利くのに驚いたよ」

「本当ですわね」

「あたしの評価はそんなんだつたのかつ!?」

小さく笑う俺らに摩耶は天井に向けて両手を突き上げて、威嚇して

くる。

その姿に笑みが浮かび、俺は渡された書類を読んでいく。

内容は俺が送った書類の返事だ。

艦装関連はすべて許可を出され、無事に熊野用の艦装改修案が通つたことに安堵する。砲撃を捨て、空中聴音機と水上機のみというあとは視覚障害者と暮らしてわかつたことや、艦娘運用についてのこともおおむね好評価だ。

機嫌良く書類を読み進めていくと、一気に気分が悪くなり見なかつたことにしたくなるものと出会ってしまった。

それは熊野の異動指示。

戦力として使えるようになつた熊野を戦闘に出すというものだ。じつくりと読み進めていくと、この書類を持ってきた者とすぐに移動をしろと書いてある。

「摩耶」

「なんだ？」

声が低く、固くなつてしまつた俺の声に摩耶も低い声で返事をしてくれた。

その表情は感情を失つたように無表情で、いつもバカ話をしていた摩耶とは違う。

そのまま摩耶とにらみあい、熊野が読み終わるのを待つ。

ちよつとの時間が数分にも感じ、熊野が書類を読み終わつたときには一層空気が重くなつた気がした。

「読んだな？」 熊野はあたしんとこの提督の指揮下に入つて新しい艦装の調整と訓練に入る。なに、前線から1歩後ろのところだからそれほど危険はないぞ？

真面目な話でこれから予定を言つたあと、空気を軽くしようと笑い声をあげる。

軍が決めたのだから俺はその指示に従うしかない。

艦娘は戦うことが当然だ。

熊野が俺の手から離れることが寂しいとか、戦わせるのが嫌だとか言うのは間違つていい。

戦うことで誰かを守ることができる。

このことをいらだつた意識にねじ込み、深く深呼吸して気を落ち着ける。

「内容は大規模攻勢を近々するから、そのときの戦線後方を安定させる役割だ。熊野たち障害持ちの艦娘を健常者な艦娘が指揮するつて聞いたぞ」

隣の熊野の顔を見るとおだやかに摩耶の話を聞いているが、俺の手を強く握つてくる。

熊野も俺と同じように素直に受け入れられないことを知ると安心し、冷静な思考が戻つてくる。

そして摩耶に言われたことを考えると、単に戦力が足りないから手当たり次第に突つ込むわけじゃないらしい。

きちんと戦力として扱い、捨て駒にはならないと聞いて安心する。軍上層部が艦娘たちを安心させるための嘘とも思ったが、上の人物がまともな頭を持つているなら現実的な案だから信用しても大丈夫なはずだ。

「提督、わたくしは行きますわ」

「そうか」

他に言葉はなく、誰も何も言わない時間が過ぎて行く。

俺と熊野の様子を摩耶は交互に見たあと、目をつぶりしばらくしてひとりうなずいたあと、リュックサックから新しい書類を1枚出して俺に渡してくる。

その内容は今までのとは違い、摩耶の提督からの個人的なものだった。

前線に戻りたいのなら、熊野を指揮下に置けるようにしてもらいいと書いてある。

一度も会つたこともなく、俺との関係性なんて摩耶を通じてだ。俺は無力な存在であり、辺鄙な場所にいる出世の見込みもない提督だ。俺に対してもここまでよくしてくれるのはよっぽどのお人よしだ。摩耶がこんないい子なのも納得できる。

そんなありがたい申し出だけれど、俺は書類をそのまま摩耶へと返

す。

「……いいのかよ、お前」

「もう艦娘たちを沈めたくはないんだ。それじゃあなんで提督を続けているんだって言われるだろうけど」

ここで言葉を区切り、熊野の顔を見る。

熊野の顔は俺を見ていて、さつきまで強く握ってきた手は柔らかさだけを感じる。

「俺はここで熊野と暮らせれば、それで幸せなんだ」

自分でも驚くほどの優しい声で摩耶にそう言つた。

物凄く個人的なことで、すぐに提督という地位を外されるほどに今の俺はなつて いる。

もう言つてしまつたから発言は戻せない。

言わなかつたほうが戦場から帰つてきた熊野と暮らせる可能性もあつた。

でももう遅い。

摩耶がこのことを伝えれば、俺の人生は大きく変わつてしまつ。

予想通り、摩耶は目を見開いて驚きのあまりに言葉を失つて いる。

「熊野、荷造りしようか」

「わかりましたわ、私の提督」

固まつた摩耶を放置し、熊野を連れて2階へと行く。

——熊野と暮らして2カ月と1週間。

もう何年も一緒に暮らしていた気がしたけれど、実際には短い時間だつた。

2階の部屋はふたりで半分にして使うスペースを決めた。
家具もカーテンも熊野の意見をよく聞いて買つた。

快適な生活を送るために。

電灯のスイッチのすぐ下に点字でわかるように加工もしたし、歩きやすいように頻繁に掃除をして物の位置を変えるときには熊野に必ず相談をした。

なにかをするにも熊野と一緒に。

それは息苦しいとはじめのうちは思つた。

こんな生活はすぐに嫌になつて、俺か熊野のどちらかが文句を言つて終わるだらうつて。

でもそれはならず今まで続いていた。

この2階は俺達の信頼関係を形として表現しているんじやないかつて、おおげさなことを思つてしまふ。

過去の記憶を楽しみながら、熊野の荷物を整理していく。

服に靴、化粧品や点字本。

ここにいるあいだにずいぶんと荷物が増えたから、熊野が持つてきただバッグだけでは足りなくなつた。

俺が持つてきたバッグにも荷物を入れることでようやく準備が整つた。

俺は両手にバッグを持ち、後ろに杖をついた熊野を連れて1階に戻つてくると摩耶はリュックサックを背負つて待つていた。さつきまでの固まつた様子はなく、俺の顔を見てはため息をつき、疲れた様子になつてゐる。

「お前つていう男は変わつてるな」

「成長したんだよ」

ここに来てから考え方が柔軟になり、心に余裕を持つれるようになつた。

それを俺は成長と呼ぶ。

つい3カ月前までは多くの艦娘たちを従えて、艦娘である彼女たちを気にせずに戦果ばかり気にしてゐた。

今ではたつた1人の艦娘である熊野のことだけを考えている。他のことは熊野の次だ。

「初めてお前と会つた時から、提督と艦娘の関係はどうあるべきかって考えてたんだが……」

「参考になつただろ？」

「そんな考え方が参考になつたら、すべての提督は艦娘と結婚しちまうよ」

そう言われて俺は苦笑する。別に熊野と結婚する気もなく、ただ一緒に暮らしたいと言つただけなのに。結婚とは考えが早すぎる。

摩耶は先に外へ出て行き、俺と熊野もあとをついていく。外に出ると雨音だけだった世界に、小型トラックのエンジン音がかかる。

「荷物はあたしが積むから」

両手を伸ばした摩耶にバツグふたつを渡す。

それから摩耶は俺の隣にいる熊野の前に近づき、耳元へ唇を近づけた。

「——愛しい提督といちやついておけよ」

「そんなのじゃありません!」

俺にも聞こえる摩耶の言葉で俺と熊野は恥ずかしくなり、お互に頬が赤くなる。

摩耶は俺たちを無視し、あつはつはと大きな笑い声と共に、小走りで小型トラックに近づいて荷物を積み込むと、同じ場所に乗り込んでいった。

どうやら助手席は熊野に譲ってくれるらしい。

「あの、提督?」

「俺はきちんと独り暮らしをするからな?」

「はい、その心配もしていますけど」

「ワンコにも伝えておくからな。あとは熊野と仲良かつた八百屋のおばちゃんに、むさくるしい土建屋のおっさんたちと——」

その言葉をさえぎり、熊野は俺の胸の中に強く飛び込んできた。寂しげな顔の熊野の背中に手を回して抱きしめたくなるが、それは恋人関係のように思えてしまう。だからそこを我慢して頭を撫でることにした。

俺と熊野は友達で兄と妹のような関係。恋人は俺と熊野の望むものではない。

頭を今までで1番優しく撫で続け、数分ほど経つてから熊野は笑顔になつて俺から1歩距離を取る。

「行つてきますわ」

「ああ」

気の利いた言葉が頭に出てこず、普通の返事しか言うことができない

い。

俺が思つて いる以上に、熊野がここからいなくなつて戦場へ行くことにひどく動搖しているみたいだ。

返事をしたあと、熊野はまつすぐに小型トラックに乗り込んでいつて雨の中、出発していく。

俺は映画のよう に手を振ることも大声をあげることもなく、静かに見送る。

そしてこの場所には自分1人だけとなつた。

熊野が帰つてくる時期はわからず、もしかしたら帰つてこないかもしない。

嫌なことを考へてしまい、もつと明るいことを考えようとする。その時に映画のようなことをして帰りを待とうと思いつく。

雨の中へと1歩踏みだし、雨にうたれながら考える。

服に段々と雨が染み込んで体が冷え、意識が冷静になつていく。雨という今の天気を参考にして、映画『雨に唄えば』のように熊野が帰つてきたら踊つて歌えばいいかと思うが、その時に雨が降つていいかも知れないでのでこの考えはやめる。

そもそも帰つてくるまで明るいことを考えようとしているのに、それだと帰つてきたときにしか明るくならない。

さらに考え、”帰つてくるのを待つ”ということだから同じような映画を参考にすればいいと気付く。

その映画は『幸福の黄色いハンカチ』だ。

多くの黄色のハンカチを使うシーンを思い出し、それにならつて同じようにハンカチをあちこちに飾りつけようと考える。

映画では、服役中の主人公が刑務所の中で妻と会つたときに離婚する話になつていた。

でも主人公は、自分の帰りを待つてくれるなら家の前に黄色いハンカチを掲げてくれ、というようなことを言う。

そして出所したときに自宅へ戻つてみると多くの黄色いハンカチが家の前にあり、妻と再会するという話だ。

映画のあとで黄色いハンカチは『愛する人の帰りを待つシンボ

ル』『夫婦愛の証』と言われることもある。

熊野が映画や意味を知らなくてもいい。これは俺が安心するためだから。

自分のために決意し、やることが決まってテンションが上がった俺は勢いよく監視所に走つて戻り、ペンと紙を手に持つて計画を考え始めた。

熊野が帰ってきたときにその光景を見ることはできなくても、俺が熊野のことをどれだけ待つたか伝えた時に喜んでくれると信じている。

だから熊野。

無事に帰つてくれ、と俺は願う。

熊野と世界の果てで

摩耶と一緒に熊野が戦いへ行き、俺ひとりでの生活が始まった。ひとりになつて最初にしたことは、大事な熊野が無事に帰つてくること願つて黄色いハンカチをつけることだ。

外に杭を打ち込んで2mの高さになつたそれに、紐を上から下までしっかりとくくりつけてから黄色いハンカチをつけた。

あとは時間が空いてしまうと熊野のことを考えてしまふため、色々やることを作る日々。

そうして、以前にもらつた古い猟銃の手入れでもしようかと銃について調べると、何年も使つていらない銃は所持してはダメだそうだ。なので、銃をくれた古書店のじつちゃんにその話をして少々もつたいなくは感じるが銃を警察に渡すことに。

弾薬のほうは銃砲店に頼んで持つていた8発のうち5発は処分してもらい、残つた3発は空薬莢と弾頭でキー ホルダーを作つてもらつた。

そのうちの1つはじつちゃんにプレゼントし、思い出を気軽に持ち運べると喜んでくれた。

ワンコにもあげようかとしたが、小学生にプレゼントするものでもないよなと思つたのでやめておいた。

そんなことをやつた以外は大体が毎日同じことの繰り返しだ。

ひとりで海岸を見回り、畠の世話をしてラジオを聞きながら何もない時間を過ごした。

時々、ニュースで艦娘たちが出撃した大規模攻勢の話があつて勝つた時には喜び、被害が出たときには熊野の名前がないか緊張して聞いた。

……自分しかいないこの場所は、寂しいものだ。



熊野がいなくなつて、日が1カ月と1週間たつた。

11月の第3週となつた今日は空気がひんやりと冷たく、物凄い美しい青空が広がつてゐる。

いわゆる秋晴れと呼ばれているものだ。

俺は制服を崩して着ていて、麦わら帽子をかぶっている。手には農作業用の手袋を身につけた格好だ。

そんな格好でやるのは、辺鄙な場所のここへと飛ばされてから種をまいた畑での収穫だ。

その時に植えた野菜はなんとか食べれるような大きさになつていた。

薬や肥料をそんなにやつていなかつたから、大きさや形がばらばらだ。けれど自分で食べる用だから何も問題はない。

自分で育てて収穫するというのは心躍る、という予定だったがどうにも憂鬱だ。

本当なら熊野と野菜の出来について話をしながら収穫ができたはず。

寝ても起きても頭から熊野のことが離れず、こんなにも女らしい男だつたかとため息をつく。

自分に情けなさを感じつつ、しゃがんで小松菜を収穫してカゴに入れていく。

小松菜をどんな料理にして食つてやろうかなんてことを立ちあがつて考えていると、後ろの方から砂利を踏みしめる足跡が聞こえる。

熊野のことばかり考えていたから、都合良く熊野が帰つてきたのかと思つてしまつた。

でもそれは单なる想像。熊野の性格だときつと電話や手紙で帰つてくる連絡をするに違ひないから。

誰が来たのかと思つて振り向くと、そこには杖を使いながら監視所兼住居の建物と歩いていく熊野の姿があつた。

声をかけることも忘れ、制服を着て片手にバッグを持つている姿は妄想かと思う。

そんな都合よく会えるだなんて、映画やドラマじゃないってのに。

そもそも帰つてくるのが急すぎてどう反応すればいいか。怪我はしてなさそうに見えるからそれを喜んで声をかけるべきか。

どうしようか頭で必死にかつこいい言葉を言おうと考えていたが、熊野が俺に気付かず監視所への扉の前に立つたところで声をかける決心がついた。

「熊野！」

大声で声をかけると熊野が俺へと振り向き、その顔はまぶしいほどの笑顔を俺へと向けてくれる。

それを見て、俺は手袋を脱ぎ捨てて熊野の方に歩いて行く。

熊野はバッグと杖を降ろし、俺へと走り出してくる。

その速度は遅いとはいえ、今まで走ったところなんて見たこともなく、さらには杖も使わずに来るものだから転びそうなのが心配で慌てて走つていく。

熊野との距離はすぐに縮まつたが熊野は減速する気配もなく、俺は段々と速度を落としていく。

そして、熊野は速度そのままで俺の胸元に頭突きをするかのように突っ込んできてバランスを崩したが、熊野の背中に手をまわして抱きしめることで耐えきつた。

熊野は俺の胸に顔を押し付けたままでいる。

「驚かせることができましたか？」

「心臓に悪い。来るなら来るつて連絡してくれ。それと走るな、杖を使え。転ぶかと心配したじやないか」

「すみません。でも鈴谷が。あ、わたくしの親友なんんですけど、提督の話をしたら驚かせたほうが喜ぶと言わされましたので。それで、その、どうでした？」

俺の腕の中にいる熊野は俺を見上げ、叱られるのを怖がる子供のような表情をしていた。

それを見ると説教をする気もなくなり、雑に頭をぐりぐりと撫でまわす。

「せつかく提督のためにとセツトしてきたのですけど？」

不満と嬉しいという感情が入り交じった複表情の熊野が可愛く見えてる。

ひととおりじやれたところで、熊野に言いたいことがあったのを言

う。

「熊野が帰つてくるのを願つて黄色いハンカチを巻いたんだ」

『幸福の黄色いハンカチ』ですか』

「なんだ、知つていたか」

「目が見えていた頃は無声映画に演劇にミュージカル、ジャンルも色々なものを見ていましたので」

「芸術好きだつたか」

「はい。もし見えていたなら、きっと感激して涙を流してしていたのでしようね」

熊野を抱きしめていた手を離すと、熊野は俺から1歩、2歩と離れてからあたりを見回す。

そしてまた俺へと顔を戻す。

「でも見えなくとも、わたくしのために用意してくれたその気持ちが嬉しいです」

熊野を喜ばせようとしたことが逆に喜ばされてしまう。

久々に熊野と会えたことと、褒められたことに俺の目に涙が浮かんでしまう。

それを気付かれないように静かに目元を指で拭う。

「どうかしました?」

「熊野は口が上手だなって思つてたんだ。ほら、中に入ろうか。今までのあつた話を聞かせてくれよ」

「今夜は寝かせませんわよ?」

そう微笑みながら俺の隣へやってきて、肘を掴んでくる。

俺は久しぶりに連れて歩くことに慎重になりつつ、熊野を家の中へと連れていった。

熊野をソファアームに座らせ、さつき熊野が放置したバッグと杖を回収してテーブルへと置いた。

そのまま熊野を待たせて、温かいインスタントコーヒーをふたつ用意し、マグカップに入れ持つていく。

テーブルを挟んで熊野の向かい側に座り、マグカップを熊野へと渡

す。

「聞きたいことはたくさんあるんだけれど、どうするか……」
「では、わたくしが自由に喋らせていただきますわ」

「お願いするよ」

コーヒーを少し飲んだあと、熊野の話を聞くことにする。
話したくてたまらないという熊野は頬に手を当てて考えたあと、
ゆっくりと喋り始める。

その内容は様々だつた。

久々の戦闘訓練は楽しかつたけれど、水上機しか飛ばせない装備だから砲撃の快感がなかつたこと。

前にいた鎮守府で親友だつた鈴谷と会えたのがとても嬉しく、耳が聞こえなくなつていたので驚いたこと。

それでも鈴谷の提督という人を介して会話をし、お互いが無事で艦娘としてやつてていることに安心したことを。

戦いはあつさりするほど終わり、そのあとは俺に早く会いたいために1人で先に帰つてきたと言つてくれた。

今後も重要な戦闘があれば、上から借り出されることもある言う。つまりは予備役扱いになることらしい。

そんなことを熊野は嬉しく、時には悲しく。

ころころと変わる表情で話をしてくれた。

1、2時間ほど会話をした頃だろうか。

突然、熊野が口を閉じて黙つたままになる。

たくさんの会話のあいだに、俺と熊野のコーヒーはすっかりなくなつていた。

コーヒーのおかわりでも持つて立ちあがり、と言おうとしたときに熊野の雰囲気が重苦しいものに変わつたことに気付く。

ソファアから浮かしかけた腰をおろし、じつと熊野の言葉を待つ。なにか重大なことがあるのかと緊張する。

そして熊野が動き始めた。

テーブルの上から杖を持つて立ちあがり、俺がいる方へとやつくると身を投げ出すようにして乱暴に俺の隣へとやつてくる。

俺の肩へと頭を置き、腕を優しく掴んできた。

「……提督の隣が一番安心しますわね」

「俺も同じ気持ちだよ」

穏やかな声で言う俺達。

すぐ隣にいる熊野の髪の匂いは懐かしく、今まであつた寂しさがなくなつて心が満たされていく。

もう熊野がいないと俺はダメになるんじやないかなんて思えてきた。

熊野もきっと俺がいた方がいいと思ってくれているはず。

夫婦でも恋人でもない不思議な関係。

それはとても落ち着くもの。

他のなにかで補うなんてことはできないと思つていると熊野が恥ずかしそうに微笑む。

大事なことをまだ言つてなかつた俺は、熊野に微笑みを返して口を開く。

「おかえり」

「ただいまですわ」

今この瞬間から退屈な日常が戻ってきた。

俺と熊野しかいない、この世界の果てに。